



# 地域移住ラボ

## フィールド 和歌山

CHIIKI  
IJUU  
LABO  
FIELD  
IN  
WAKAYAMA

熊野にある暮らし、  
高野にある暮らし。

### 目次

- P 2・ABOUT
- P 3・熊野にある暮らし
- P 3・熊野概論
- P 5・土地の声に耳を傾ける暮らし
- P 9・クロストーク
- P 13・暦とおむすび
- P 15・高野にある暮らし
- P 15・高野概論
- P 17・自分の真ん中に戻ってこられる暮らし
- P 21・クロストーク
- P 24・虹の瞑想法
- P 27・最後に



# ABOUT

「日本中どこでも一緒になったねえ。特に町の風景が。」作家の立松和平さんは、和歌山県の広報誌『和』のなかで、こう続けました。「今の時代というのは、コストが安いものが多いという、つまり「工業製品の大量生産されたものが多い」ということになるわけですよ。どこへ行っても同じものになって、全国均質化されていく。よくここまで同じ町をつくったなと思うぐらい質が同じになりましたね。和歌山には、風土の上に根差した生活がある。何か“和歌山くささ”を残して行ってほしいですね。」\*1

暮らしを考えるには、どんな情報が必要でしょうか。地域は、何を伝えたいのでしょうか。海があり、山があり、川がある。シンプルな言葉で、シンプルに風景を切り取ってしまえば、どこも同じように見えてしまうのかも知れません。しかし、よくよく目を凝らして、耳を傾けてみると、その土地にしかない、その土地らしい暮らしとそこに住む人の姿が見えてきます。移住を考える時、つつい移住先の制度など、目先の物事に気を取られがちになってしまうものです。しかし、それだけではなく、そこで暮らす人々に受け継がれてきた文化や、大切にされてきた価値観を知ること、きっと、大切な視点だと思うのです。そんな“風土の上に根差した暮らし”が残っているのも、ここ、和歌山県なのです。

今回、和歌山県の誇る自然に立脚した文化の代名詞「熊野」と「高野」を舞台に、この土地にある暮らしを紐解いていくイベントを、2017年の8月と10月の2回に渡り、東京で開催しました。イベントまでには、自治体、移住者、有識者のみなさんと、そして、当日には参加者のみなさんとも対話をしながら、それぞれの土地にどんな暮らしがあるのかを探ってきました。このレポートは、イベントまでのプロセスの中で聞いたことや話したこと、そしてイベント当日の内容を元に、作成しました。

地域を知れば、和歌山県を知れば、知った分だけ、もっともっと好きになるはず。人は、土から離れて生きてはいけないのだから。あなたの暮らしが、地域の暮らしが、より豊かなものとなりますように。

## 和歌山県、紀伊国

木の国・川の国・水の国。和歌山県を表現する時に使われる言葉です。和歌山県は、近畿地方の南につきでた紀伊半島の南西部に位置しています。和歌山県の面積の大部分をしめるのは、紀伊山脈を中核とする標高1,000メートル前後の山岳地帯で、高野山、那智山など古くから山岳霊場として親しまれてきた山々があります。温暖で雨が多いため樹木がよく育ち、その山林資源の豊かさから「木の国（紀伊国）」と称されてきました。これらの山々をぬうように、紀ノ川、有田川、日高川が西に、富田川、古座川、熊野川が南に向かって流れる「川の国」でもあります。また、和歌山は南北の距離が長いため、北部と南部では気候が異なります。北部は紀北、南部は紀南と呼ばれており、世界遺産である高野山は紀北に、熊野古道は紀南にあります。紀南は、平地が少なく高い山が多いという雲が発生しやすい地形に加え、黒潮の影響を受け温暖で台風の影響を受けやすいため、雨量の多い「水の国」としても知られています。



写真提供：新宮市役所 商工観光課「ささびの輝き」(左)  
 引用：\*1 和歌山総合情報誌「和-nagomi」vol.1 (2007)、和歌山田舎暮らしバイブル 巻頭インタビュー  
 出典・参考：和歌山県HP、和歌山地方気象台HP、和歌山県謎解き散歩/小山巖城著 /2012/新人物往来社

## 熊野にある暮らし

澄んだ水や空気、豊かな森に囲まれた暮らしが、「土地」に生かされているという感覚を生み、自然に対して感謝や畏敬の念を抱く自然信仰の源となったといわれています。自然による恵みを感じ、その声に耳を傾け、それを活かす暮らしがどのようなものなのか、熊野の成り立ちから暮らしまでを探って行きました。

### 熊野概論



写真提供：新宮市役所 商工観光課 (上)「幽玄熊野川」、(下)「神聖な森」

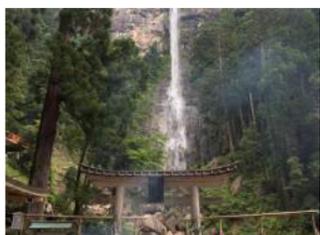
出典・参考：[NHKスペシャル 列島誕生 ジオ・ジャパン 第2集「奇跡の島は山国となった」] / 和歌山総合情報誌「和-nagomi」vol.15 (2011) , [特集] 100年目のエコロジー

#### 『急峻な山岳地帯と隠のイメージ』

紀伊半島南部に広がる熊野には、古座川の一枚岩や虫食い岩、ゴドビキ岩など特徴的な巨石が数多く点在しています。その巨石の分布と同じような軌道を描いているのが温泉の分布です。最新の研究によると、今から1,400万年ほど前に、地球最大規模の超巨大カルデラ噴火がその軌道上で発生し、噴火が収まったあと、火口に残ったマグマが冷えて固まり岩となり、熊野地方に点在する数々の巨石となったのではないかとされています。また、このカルデラ噴火により膨大なマグマが地下に残され、そのマグマが冷えてできた巨大な花崗岩がその性質から地上に浮かび上がろうとした結果、上の大地が持ち上がり、紀伊半島が急峻な山岳地帯となったといわれています。深い山に囲まれ薄暗く、しかも日本で最も雨が降りやすい地域ということもあって、「隠」のイメージが強い熊野は、このような地質変動を経て、生まれたようです。

#### 『知の巨人によって守られた豊かな森』

熊野に豊かな自然が残っているのには、和歌山県出身の知の巨人・南方熊楠の存在も大きく貢献しています。熊楠は、10数ヶ国語を自由に使いこなし、博物学、民俗学、細菌学、天文学、人類学、考古学、生物学など、多岐にわたる分野で国内外に多くの論文を発表した、知の巨人として知られています。熊楠は明治時代の後半、神社合祀令により地域の生態系を育ててきた森が伐採されていくことに猛然と抗議し、反対運動に心血をそそぎました。1911年には当時の県知事に一通の書簡を送り、その中で「生物と環境は相互に影響を与えあい存在するもの」=生態学という概念を、日本で初めて「エコロジー」という言葉を用いて説明しました。そして、彼の情熱は世論を動かし、1920年、貴族院で神社合祀令が廃止されます。熊楠が守ろうとした自然と人間との共生が、今の熊野の暮らしを繋いでいるのです。



#### 『自然神信仰と熊野』

熊野三山（熊野本宮大社、熊野速玉大社、熊野那智大社）へと通じる参詣道の総称を熊野古道といいます。古代から中世にかけて、上皇・女院から庶民に至るまで、多くの人々がこの道を通って、熊野三山を参詣しました。三社は個別の自然崇拜に起源を持ち、本宮は熊野川を、那智是那智の滝を、速玉が神倉山のゴドビキ岩を神の依代・御神体としていました。熊野は、今もなお、山や滝には神が宿ると信じられている特別な地域なのです。

#### ▶▶▶ Speaker



話し手：熊野亭雲助  
元・新宮市経済観光部長。落語家  
和歌山県新宮市出身。立命館大学文学部卒業  
(ただし落語研究会を)。数年の放浪を経て、  
何かの手違いで新宮市役所へ。五代目桂枝門  
下21番目の弟子を自称。高座名は山深き山賊  
をイメージする熊野亭雲助。難しく語られがちな  
熊野（熊野信仰）の世界を庶民目線で捉えて  
いただくこと、落語を演じるだけでなく創作落  
語の開発など積極的に活動を行なっている。

#### 『熊野信仰について』

熊野と書きまして、これを「ゆや」と呼んでいただきます。熊野亭雲助と申しまして、決して怪しい者ではございません。いたって気の小さい、ちょっとだけ腹黒い男でございまして・・・で、本日のテーマが「熊野信仰について」ということでしてね、大層な話でしょう？専門家でも何でもなし、ただただ口先だけの男が熊野信仰について語るなんて、誠に大仰なことなんです、どうかよろしくお付き合いをお願いします。

さて、熊野信仰における神様と申しますと、三つの大社、これを熊野三大社あるいは熊野三山とお呼びしますが、これらの社に12の神様が同じようにお祀りされているのでありまして、那智だけは御滝も神様として数えて13なんですけれども、とにかく12の神様をお祀りし合っているというのが大きな特色なんです。もちろん、それぞれ主祭神は異なりますが・・・。川・滝・岩あるいは巨木などへの畏怖を原初的な形態とするアニミズムは、三大社・12の神様に詣でるといって熊野信仰へと繋がり、現在に至っているのです。

では、そのような形態を持つ熊野信仰とは、一体いかなるものか？私、ご紹介いただきましたように素人ではございますが断家でございます。その断家目線やからこそ見える熊野信仰というのがございまして。どういふことか？それは江戸・上方の両方に「三枚起請」という古典落語がございまして、簡単に要約いたしますと、鼻の下を伸ばした3人の男が1人の遊女に騙されるという話でございましてね、その重要なキーワードになってますが、「熊野のお札」<sup>(1)</sup>と

[1]



熊野のお札の3枚のうちの1枚、熊野速玉大社のお札

[2]



中央の黒い鳥が八咫鳥

呼ばれるもの。廓の世界では、このお札を身請けの起請文として利用したんでございますね。正式には「熊野牛玉符（くまのおおうふ）」といい、八咫鳥（やたがらす）の象形文字で成り立っているこのお札。熊野信仰の広範な伝播とともに、全国津々浦々へと広まっていったのであります。

このお札につきましては、また後ほど語るといたしまして、ちょこっと触れました八咫鳥<sup>[2]</sup>。この3本足の八咫鳥もまた、熊野を彩る重要なファクターなんでございますな。いわゆる熊野が歴史上登場してまいりますのは、「古事記」「日本書紀」の頃。つまりは712年とか714年の頃ですよ。ご存じのとおり、「古事記」「日本書紀」というのはフィクションでございませう。それらフィクションに、何故、熊野が登場するのか？大和朝廷を興した神武天皇。その国造り神話において、神武天皇が熊野浦へ上陸後、大峰山系を経て大和へ向かう道中、その道案内をしたといわれるのが、八咫鳥だとされているんですね。つまりは、八咫鳥というのは熊野の神々が遣わしたる御神鳥それも霊能力を持った瑞鳥というわけなんで

すね。さあ、それでは何故にこの国造り神話において、神武天皇を熊野から大和へと入場させなければならなかったのか？実はここにこそ熊野の神髓が潜んでいるのでございますよ。この平安時代の中期というのは、上皇貴族を中心とした熊野参詣が盛んになり始める頃なんですが、この当時、中央であつた京都からは熊野はどのように見られていたのかと申しますと、日域の南極つまりは「日本の一番南の際にあつて、太陽が上り下りするところ」というように考えられていたんですね。ですから、神武天皇の熊野から大和への道程において、太陽を背にして入場させる。つまりは神武天皇は太陽神にも認められているんだよという“しつらえ”の中、記紀神話に登場してくるわけなんです。

はてさて、このように歴史に登場してきた熊野は、平安時代の中期から鎌倉時代にかけて一気にグーンと信仰の聖地として、上皇貴族の間に広まっていきます。「本地垂迹」なんて言葉聞いたことないですか？本地垂迹というのは、仏あるいは菩薩様がですね、悲しみや苦しみから衆生を救うために神の形を借りて、この世に現れる。これが本地垂迹という意味なんです。そこへ輪をかけるように、次に末法思想というものが流布します。末法というのは、世も末やちゆうことなんです。つまり、お釈迦様がお生まれになって、そこから2000年経過した時点で、「もう仏とか仏教の教えとかどっかに飛んでしまふ。それこそ世も末や」といわれるのが、これが末法の時代つまりは末法思想なんです。この末法の時代に入る頃から、熊野は本地垂迹の最たるところ、過去の贖罪・現生利益・極楽往生を与えてくれる「浄土の地」としてクローズアップされ、上皇貴族による熊野御幸すなわち熊野詣です。これが始まるのでございます。白河上皇・鳥羽上皇・後白河上皇・後鳥羽上皇、彼らの100年くらいの間、何と合計100回ほどの熊野御幸を行ったというから驚きです。平安中期、上皇貴族らが口火を切った熊野詣。鎌倉室町に至り、その信仰は戦国大名そして武士へと引き継がれ、やがて庶民へと広まります。江戸時代に至りましては、伊勢参り同様、熊野詣も大変盛んになっていくのであります。

さあ、そのような熊野信仰の流れの中、熊野のお札の話に戻りますと、上皇貴族・戦国大名・武士・庶民というふうには熊野詣が繋がっていく過程で、このお札の使われ方もそれぞれに違って来ます。これがまた面白いんですね。上皇貴族の間での使われ方ちゆうのはようわからんのでありますが、戦国大名や武士の間で、このお札がどのように使われたかといひますと、これを誓いの紙つまりは誓紙に用いたんです。例えば、源義経ございませう？あの義経さんが兄の頼朝さんに「私はお兄さんの弟やから、どこまででもついて行きますよ！」という忠誠の言葉を書いたというのが、このお札の裏なんでございます。その他には、戦国時代、同盟を結ぶための血判状なんかにも利用されたんであります。

ぐつと時代が身近になります、江戸時代。我々庶民の時代になってきますと、熊野のお札は更に更に一般的になります。いきなり話が庶民的になっちゃいますが、先ほどの三枚起請の話。遊女の起請文。この起請文とはいかなるものかといひますと、まあ、遊女というのは年季奉公の世界ですから、「年季が明けたら、私はあなたの元へ嫁ぎます」というような約束事です。このような言葉をお札の裏に書いて、扇屋客に渡すんでございます。アホな男どもは、これにころつと騙されるといひ。庶民の間での使われ方は他にもあります。お金の貸し借りの際に書く証文。これらの証文にも、よく使われたんやそうです。

冒頭で、熊野のお札は八咫鳥の象形文字で成り立っていると申しましたが、何故に八咫鳥が用いられているかといひますと、八咫鳥とは熊野の神々が遣わしたる瑞鳥であり太陽神の化身であります。その八咫鳥で成り立っている熊野のお札で約束をし、もしもそれを破ったとしたら、「熊野で鳥が三羽死ぬぞ！」というのであります。つまりは、「約束を破りし者は大罪を犯すこととなり、血反吐を吐いて死んでしまうんだぞ。だから約束を破るなよ！」ということなんです。

毎回かどうかは分かりませんが、熊野本宮大社での結婚式。新郎新婦揃って、誓いの詞なんていうのを読み上げるのでございますが、その際の誓紙に、このお札が用いられているとお聞きします。皆さん、お幸せであればいいんですが、中にはお別れ、つまりは離婚された方もいらつしやるかと思ひます・・・血反吐を吐かれて、大丈夫やったんでしょうか？心配になってきますが・・・まあ、とにかくにも、熊野のお札は現在も珍重されているのでございます。

走り走り、かつハチャメチャな内容となつてしまひましたが、熊野信仰の成り立ちそして我々庶民にとっての熊野とはというようなお話をさせていただきます。支離滅裂な内容になつてしまひました。どうかお許しをくださいませ。で、最後に、私も素人ではございますが、断家の端くれでございます。ここは一つ、断家らしく「なぞかけ」で締めたいと思ひます。よろしゅうございませうか。「熊野への移住とかけてまして、かつら・ウイッグ・付け毛などの専門店と解きます。その心は、……髪々（神々）が出迎えます。」・・・ご静聴、誠にありがとうございました。

## 「土地」の声に耳を傾ける暮らし 1

▶▶▶ Speaker



話し手：宇澤 聡子  
サンサロカフェ & ゲストハウスオーナー  
大阪府出身、元服飾デザイナー。3.11後、時間やお金エネルギーを浪費する都会暮らしに違和感を感じ、地球をもっと感じる暮らしにシフトしたくてミュージシャンの旦那と小学生の息子と共に自然が深い熊野に2013年移住。移住後は2015年ベジタリアンカフェオープン。イベントオーガナイザーやゲストハウス経営、ヨガ講師や、ナチュラルコスメ開発、など刺激的な田舎暮らし満喫中。

みなさま、初めまして。和歌山県新宮市から参りました、宇澤と申します。私が住んでいる熊野川町というのは、熊野三山の中心地にあたります。「円座石(わろうだいし)」という熊野三山それぞれの神様たちがこの岩の上で談笑するっていう、神様のミーティングポイントになるんですけども、そこがうちの町内のすぐ近くにあるような所になります。

家族構成ですけれども、こんなちょっと強面なのがうちの旦那さんですね。(笑) わんちゃん、かわいいはるちゃんと、うちの息子は中学校1年生です。<sup>[1]</sup> 移住した時は小学校2年生でした。主人はこう見えて、郵便配達員をやっています。本人曰く、「愛の配達員」ということ。(笑) すごく、機嫌よくお仕事をやっています。移住する時は、会社の上司たちから、「和歌山県学力最悪だよ!」といわれていたんですけど、うちの小学校30人ほどの小さな小学校で、本当に塾とか何もないところですけども、校長先生と教頭先生が毎日ね、勉強を放課後見てくれるという事でね。学力は決して低くはないんです。和歌山県の中でも結構上位です。

私自身の略歴なんですが、元々は服飾デザイナーをやっていました。大阪生まれ大阪育ちです。7年ほど企業デザイナーをやった後、ちょっと企業で働く事に疲れて、辞めてからはバックパッカーで、世界各国20カ国くらい回ったりしていました。結婚、子どもを産んでからも、やっぱりアパレルの仕事がずっと続けていたので、結構長いキャリアはありました。2009年、今から8年前に初めて夏休みに熊野へ子どもと訪れたんですけども、ある意味衝撃を受けたんだと思います。2013年に熊野に移住しました。2011年、東北の震災がありましたよね。あの時に移住というのを意識し始めました。原発が事故をおこしてというあの辺りにすごく私はショックを受けて、今までのあたり前の暮らしに疑問を感じ始めていました。エネルギーを無駄に使ってお金を浪費し、時間を消耗するという流れの中から自分は抜け出して、自分の理想の世界をつくりたいっていう。そういう世界を次の世代につなげて行きたいっていう思いがありました。「私はただ素敵な世界にジャンプするぞ!」っていう意気込みで移住を決めました。生活を変えるなら好きな場所に行こうと、家族で沖縄がいいかなとか、いっそ海外だったらバリ島とかいって、あちこち下見に行きました。

[1]



熊野への移住は、実はあんまり考えていませんでした。っていうのは、2011年、同じ年に大きな水害がありました。さっきいった熊野三山。本宮大社も水に浸かっちゃってましたし、下の鳥居のところとかも本当に水の被害が大きいところだったので、災害のイメージもあって最初は候補地には挙がっていなかったんです。でも、これもご縁ですけど、たまたま行った時に空き家があるよっていわれて、小学校を見学したら子どもも「ここだったら移住してもいいよ!」<sup>[2]</sup> といってくれたり。ちらっと求人を見たら、「意外と仕事あるんだな〜」とか。とりあえず安易な気持ちで「1年くらい住んでみようかな」という感じで、最初は移住してきました。

[2]



熊野川町の出会い。といっても、熊野川町ってレアな場所ですよ。この法螺貝を吹いている方<sup>[3]</sup>ですけれども、この行者さんと京都の音楽フェスティバルで出会って。うち旦那さんがミュージシャンなので、そういう音楽のイベントで出会ったんですけど、彼が熊野に遊びに来いよっていつか来て、それで子どもを連れて遊びに来たのがきっかけでした。ここに足を踏み入れた時に、体も心も本当に細胞レベルに「わーっ!」と歓喜が上がってくるというか、体がすごく喜ぶというそういう感覚がありました。その時も移住は考えてなくて、「2、3日休みが取れたらとりあえず熊野へ行こう!」という感じで来ていました。でも、ふかふかのコケのじゅうたんを歩いた時、本当に綺麗な水の中に体を浸した時<sup>[4]</sup>とかに、いいもいわれぬ幸せを感じたんですね。多分この初めて訪れた時、第一印象で私は熊野に恋をしたんだと思います。

[3]



移住までは割とスムーズで、主人の方がびっくりするくらい軽く快諾してくれたんで、そっからはトントンと移住が進んだんです。まあ〜仕事ですよ、求人はあるけども〜…、なかなかびったりくる仕事なくて、とりえず旦那さん肉体労働から入ったんですよ。それで、鉄鋼所みたいなところで勤めだしたんですけども、体をハードワークで壊してしまって入院という形になってしまいました。ということで、私が本宮大社でお客さんの写真を撮ったり、「熊野古道あつちですよ〜」ってお知らせしたりするような観光のアルバイトみたいなことを少しやっていました。

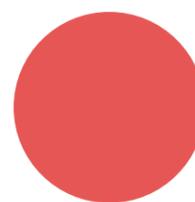
[4]



この頃、主人は体調も悪いし仕事も見つからないということで、あたふたしていたんです。でも子どもと私は「何とかなるっしょ!」という感じで、子どもはすぐに馴染みましたし、私もコミュニティをつくったりして楽しくやっていたんです。旦那だけがバタバタしていたんで、ある時、私、いったんです。「家族は同じボートに乗るチーム。私と子どもは目の前の景色を楽しんで、その時、瞬間を楽しんでいるのに、あんただけがそんなにバタバタしたら、ボートが沈むから、とりあえず落ち着いてくれ!」って。今は郵便局でね、愛の配達員とか、楽しくやっているんでね、よかったんですけど、今そのことを振り返って旦那さんと話していると、旦那さん曰く「あれは完全に男性性の崩壊だった」っていつて。今までの「男性たるや稼がなきゃ」とかそういうプレッシャー。そういう、一旦古い価値観を壊すプロセスだったのかな?と思います。



しかしね、サンサロカフェが始まってからは、我が家はだいぶ流れが変わりました。旦那さんも今は、「毎日幸せだ〜」っていつてますしね。私も息子も猫も犬も今はいて、サイコーな状況です。旦那さんは、アンチヨガでもあったんです。私ヨガもするんですけど、なぜか旦那さんが「ヨガウェアをプロデュースする」とかいって、「やったことないじゃん」とも思ってたんですけど、そのブランド名が「60%オーガニックライフ」。私たち、移住してから食事に関するオーガニック戦争が頻繁に勃発してまして、彼はジャンクフード好きで、私はどちらかというとマクロビオティックとかに興味があるので、



[5]



[6]



[7]



[8]



[9]



▶▶▶ DATA



新宮市

人口約28,000人。新宮市は、和歌山県の東南端に位置。山と海に囲まれ、世界文化遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の一部である熊野川を有する。市内には、熊野速玉大社や神倉神社に代表される数々の名所旧跡が存在し、文豪・佐藤春夫など、多くの著名人を輩出している文化的な地域。2005年10月1日に市町村合併により熊野川町は、新宮市の一部に。熊野川町は、約40の集落からなり、およそ1,300人の人々が生活している。美しい滝や苔むした山道、見渡す限りの霊験あらたかな山々。息を呑むほどの絶景が日常の風景に溶け込んでいる。

全然食生活が違っていたというのもあって喧嘩も絶えなかった時期もあったんです。辿り着いた答えとしては、フィフティ・フィフティのオープンではなくて、60%。10%寄るっていうね。—(笑)— これね、夫婦円満のコツですね。世界平和にも繋がると。それでサンサロカフェ [5] というのが始まりました。すごく自然豊かな環境の中で、私たち音楽好きで、レゲエやジャズ、アフリカンとかインド音楽とか、クラブミュージックとかダンスパーティーとかいろいろここでやっちゃっているんですけども、私自身のヨガのクラス [6] や料理教室とか、石鹸づくりのワークショップとか。自分たちがやりたいとか、学びたいとか、聞きたいアーティストを呼んで、いろんなことをやっています。移住当時は全くカフェをするイメージを持っていなかったんですけども、ご縁があって、このようにカフェは出来上がっていきました。窓から見える景色 [7]、目の前が川なんですけども、田園と川の風景です。自分たちでこういった場所をつくることで、都会で暮らすよりある意味文化的な刺激もありますし、自分たちの欲しい暮らしや遊びや仕事を自分でクリエイトできるという面白さがあります。食材もなるべく地元の食材を使うようにしています。材料がどこから来てどういうものが、それを買ったり食べたり消費したりすることで、そのことがどういう影響を及ぼすのかということもイメージするようにしています。

この春からゲストハウスを始めました。民泊というやつなんですけど、全世界からお客さんがいつもいつも来てくれます。大自然の中、やっぱりお客さんをお迎えして思うんですけど、自然信仰っていう、さっきからいっている自然の中で神々を感じる。魂の本質に触れるというかそういうエッセンスを彼女や彼らが自分の国に持ち帰っていただいて、またそれを広げていただくことで本当に世界平和っていうのを実現していけるというふうに感じています。世界規模の熊野詣というのが始まっていると思うんですね。平安時代の「蟻の熊野詣」じゃないですけど、今、世界中の方が熊野古道をめぐって押し寄せているといってもいいくらい来ているんですよ。本当に凄いです。それは日本の持つ自然信仰やアニミズムっていう感性とか日本人のベーシックな調和とかそういう精神性。それに世界中が注目してるって私は感じてます。でね、これはきっと地球からのオーダーなんだなって。みんな本当に笑顔が綺麗でね、自然の中に入った時、人は本当に素直になります。みんながキラキラしているのを見て、嬉しく思っています。

今やっていることなんですけど、そういう聖地がたくさんあるんでね。ヨガの講師もやっているの、「こういうところでやると気持ちいよね」ということでヨガのリトリートのオーガナイズをしています。女性たちを集めて女神リトリートとか舞いをテーマにした踊りとヨガを融合させたもの [8] とか、私自身もヨガをもっともっと広めていきたいということで、去年はインドに一人旅に行ってきた。そして無添加コスメティックの開発プロデュース [9] とインターネット全国販売もしています。移住のポイントとしては、収入源をいろんなツールから持っている方がいいなと思います。私もカフェだけじゃなかなか食べていけないので、いろんなことをやり始めています。ネット販売とかは割とコンスタントに収入が入るのですごく助かっています。

これからの田舎暮らしというのは、田舎暮らしだから慎ましくとかそういう感覚じゃなくて、物質的にも豊かであっていいのかなとも思っています。精神的な豊かさ、物質的な豊かさ、すべての豊かさを私は求めていて、体現していきたいと思っています。

移住当初、聖地ということ、あまり意識していなかったんですけど、住んでみると本当にここは聖地なんだなと実感しています。熊野の自然は本当に、圧倒的な美しさがあります。澄んだ水の中に体をつけた時には邪念が洗われるというか禊というかスッキリしますよね。あっちこっちに秘境があります。未だに、「わー!すごい〜」とって感動しています。私の家の近くを通る熊野古道の道が、那智の滝に続いているんですよ。綺麗な苔むした道を心静かに一人で歩いていると、本当に自分って自分の人生の主役なんだということをね、この道を歩きながら思ったんです。それまでは家族の中のお母さんとか、会社の中のこういう担当とか、何かに付随している何かとか。でもこういうふうに関わりを自分自身にスポットライトが当たるというか、そういう感覚が自然の中に一人で入っていると湧き上がって来ます。

移住については、自分の中の違和感からでした。それまでの暮らしは、安定した収入もありましたし、好きな仕事もしていました、お洋服の仕事も好きだったので。綺麗なマンションにも住んでいて、片方は満たされた感じだったんですけど、今思えば本当に自然を渴望していたんですね。移住へ舵を切ったということで私は人生のハンドルをやっと握ったな、しっかりと握ったなという感じがしています。その行き先は、心が踊る、ワクワクとした行き先に向けています。自分の責任と強さを感じつつ心はとっても軽やかなんです。今の暮らしを心から楽しく思っています。朝、目覚めた瞬間に今日はどんな1日になるのかな、どんな人と出会うのかなということで本当にワクワクして目が覚めています。ですから、4年前のあの時、移住を決めた自分を褒めてあげたいと思います。そして、今日この場をいただけたことにも感謝しております。ありがとうございます！

## 「土地」の声に耳を傾ける暮らし2

▶▶▶ Speaker



話し手：川崎 由依子  
おむすび屋 じぞうど  
千葉県出身。小学生の頃に読んだ淡路島への移住の本に影響を受け、農山村での暮らしに憧れを持つ。都内でOLをするも、お米づくりなど自分の暮らしは自分で作りたいと、移住を検討。旦那さんは間伐材の利活用に興味を持ち、田辺の桶屋の弟子募集記事を見つけ、夫婦で通い移住に繋がった。雲海が美しい山上の集落「田辺市中辺路町高原(たかはら)」で暮らしながら、地元産棚田米を使ったおむすび屋さん「じぞうど」を営んでいる。

[1]



[2]



[3]



[4]



田辺市中辺路町高原(たかはら)というところから来ました、川崎由依子です。夫と二人<sup>[1]</sup>で2015年5月の下旬に移住し、ちょうど2年3ヶ月経ちました。高原は山あいの集落<sup>[2]</sup>で、標高がだいたい300メートルから400メートル。でもこれだけ山深いところですね。住んでいるのは40世帯ほどで、だいたい60人、そのうち約3分の1が1ターンで、30-40代の人もありますし、ちょっと上の世代、60代の方もいます。スーパーまでは車で10分、山の上から降りていく感じです。世界遺産の熊野古道が通る、観光客が訪れる地域で、西側から本宮を目指す中辺路という地域の道沿いにあります。

私は山梨県生まれの父と青森県生まれの母のハーフで、千葉の住宅街で育ちました。小学校3年生の時から、モヤモヤと違和感を感じていて。例えば、ご飯を食べる時に「他の国では食べられない人もいるんだよ」と残さないようにいわれる。それなら「このご飯をそっちにもあげればいいじゃない」と思って、なんかバランスの悪い変な世の中だなと。そのくらいの時に、灰谷健次郎さんという児童文学の作家さんの「島物語」という本に出会って、その本が神戸から淡路島に一家が移住する話なんですけど。その中で、虫がいてみんなでわーってなったり、自分たちで野菜を育てたり、そういう自然の暮らしに長けたおばあちゃんたちが近くにいたり、自分の暮らしが見えるサイズにあるということにすごく惹かれて、小学校3年生の文集では「何かものづくりをしながら自給自足の生活をしたい」と書いていました。

そんな小学生でしたけど、そのことはすっかり忘れて普通の大人になりました。システム会社に就職して、でもその会社が結構暇で、毎日パソコンを見て仕事をするふりをしながら、本当は何をやりたいか調べて、自分に問う日々で。「あ、そういえば、田舎暮らし、したかったな」と思い出した時に会ったのが、パーマカルチャーというものでした。日本でいうと、里山の暮らしに近いもので、生態系を大事にしていながら暮らす術を体系化したものです。海外のものなのですが、それを日本で学べる場があることを知り、そこへ通うことになりました。「あ、こんな世界があるんだ」というのを始めて知って。それが神奈川のちょっと山沿いの地域なんですけど、土日そこに泊まって、平日会社に出勤するという一年を過ごしました。月曜日はまだ自然の中にいた感覚が残っていて、頭がボーッとしているという…。そのうち「もうここで働いていけない」と感じるようになって、仕事を変えようと思ったのが、2008年の頃ですね。まだ田舎暮らしをする勇気がなくてですね。東京を拠点に都市と農村を繋ぐ活動をやっているNPOで働き始めました。仕事や自分のライフワークの中でいろんな地域に行きながら、まだ日本にこんな地域があって、いろんな暮らしがあるんだなというのを感じていきました。そして2010年から2015年は、山梨県の上野原市の山の中にある集落に毎月通うようになりました。そこでは、みんな(都市の人と現地の人)で交流しながら大豆を育てたり、蕎麦を育てたり、その大豆で味噌をつつたりして。月に1回通いながら、その地域の季節ごとの暮らしをたどっていく感じでした。そんなことをやりながら、「田舎暮らしは本当にできるかな、どうかな」とかなり迷っていた時期でしたね。

そんな時、夫と出会って、これから本当にどこで暮らしていこうかと、2013年ぐらいから移住を考え出して、山梨、神奈川、埼玉をふたりで周り出しました。「どんなところで暮らすのがいいかな」と条件を考えた時、まず山があって、水が綺麗なところ。でも、山の標高があんまり高くないところ。長野とかだとちょっと高くて、怖い感じがあって。私が育った千葉って割と平らなところなんです。そういう平らな土地の安心感があって、高い山はちょっと苦手なんです。あとは田んぼをしたいという希望がありました。夫は棚田の風景が好きで、もう使われていないような棚田があるところがいいとか。あとは雪があんまり降らないところ。寒いのは苦手です。それから拓けている。山と山が迫っている地域ではなく、ちょっと広い地域がいいなと。あと、有名な農村地域ではない。今結構いろいろな地域で面白い方が取り組みをされて、有名なところが全国にポコポコあると思うんですけど。そういうところではなくて、「これからそこに入っていくことで面白くしていけるかな」という感じがいいねと話していました。

そんな感じで、できれば関東で探していた私たちが、和歌山に行くことになります。はじまりは、夫が突然『木桶』っていいよね』っていい出したんですね。それは、東京で住んでいた家が昭和に建てた木造の家で、すごく心地が良かったことや、木とか間伐材の利用への興味から。それで夫が、桶とか桶屋をインターネットで調べて、いまだに現役でつくっていらっしゃる方いる!と見つけたのが和歌山の桶屋さん<sup>[3]</sup>でした。直接お話を聞きたくて、会いに行くことになって。私は職人さん好きなので、一緒に行って。今私たちが住んでいるのはその職人さんがいらっしゃる場所から車で30分くらいのところ。初・和歌山だったので、観光気分でした。その場所は熊野古道沿いで景色もよく棚田もあって、とても印象が良かったんです。で、その棚田の近くに木工所があって、ギャラリーが併設してあるので中を見ていると、そこのご主人が話かけてきてくれて、「この場所いいですね」なんて話していたら「空き家があるから見ていくか」といわれて。私たちは「初対面の人に家を紹介した!」と驚いて。普通いわないじゃないですか。警戒しますよね。でもせっかくなので、いわれるがまま車の後ろに乗り、ぶ〜んって外観を見せてもらって。はじめて訪れたのが4月だったんですけど、家の印象よりも初対面の人に空き家を見せてくれたというのがインパクトが強く、やっぱり気になって6月にもう一度いくことにしました。その時は「物件が2件あるから見せてあげるよ」と、中も見せてもらって。一つは売り家で、一つは借り家でした。その後9月に訪れた時は、地域の人の稲刈りのお手伝い<sup>[4]</sup>をしたり、いろんな人とお話を伺わせてもらったり。

[5]



物件も再度見させてもらって、うーん、やっぱりここがいいねと確認をして、初めて訪れてから約半年の11月に物件の契約をしました。トイレが昔ながらの外トイレだったので、そこだけちょっと改修してもらいました。引っ越しはまだだったので、2月に行われた地域の大きなお祭りには手伝いながら参加して、5月にやっと引っ越ししました。初めての訪問からおよそ1年、契約してから半年くらいかかったんですけど、和歌山への移住はスムーズというか、ちゃんと流れがあって進んでいった感じがありました。私は東京にいる時にたまにイベントでおむすびとかを売っていたことがあって、「熊野古道沿いだからおむすび屋でもやるかね」という感じで、収入がはっきり決まっていなかった状態でした。でももう引っ越しちゃいました。

[6]



今、どんな暮らしをしているかというと、私たちが住んでいる家は、築60年の家。中は、昔ながらの田の字型で、和室が4つあって、その横にキッチン、お風呂があります。平家のお家です。「おむすび屋さんをやるからお店をつくらないと」と、家の横にあった納屋を壊して、そこに大工さんに教わりながら自分たちでおむすび小屋をつくり [5] しました。すごく楽しかったんですけど、とって時間がかかりました。できるだけ昔ながらの方法で、家を建てるというのはどういうことなのかにこだわってやりました。壁は竹で下地となる「たけこまい」を編んで、そこに土壁を塗って行って。 [6] そうすると、地元のお父さんたちが「昔はあっち(自分の山)から木を切って、竹を編んだんだよ」と話してくれたり。熊野古道歩きの人も「あ〜今時、土壁やってるの!」とすごい懐かしがってくれたり。オランダから来た人は「オランダも土壁あるよ」と教えてくれたりとか。そういう反応が面白いなと思いつつ、たまに地域の人たちや関東から遊びに来てくれた友人たちに手伝ってもらいながら、みんなで建てました。

[7]



やっとできたのが、2016年10月。 [7] 移住してから、1年ちょっと経ってましたね。おむすび屋さんはオープンしてから、もうすぐ1年というところですよ。そんな私の夏のある日はこんな風に過ごしています。まず、朝5時くらいに、猫いるんですけど、「にゃー、にゃー」というごつい声で猫が起こしてくる。それで起きて、お弁当を作ります。地域にあるゲストハウスに宿泊された方向けです。ほとんど外国人の方ですね。あとおむすび結んだりして。 [8] 私たち夫婦以外に4組くらいで協同で、大きいから小さいまで12枚の棚田をやっています。6月になるとあちこちで梅取りがあるので、梅取りバイトもします。おむすび用の梅干し [9] を仕込んだりしますね。

[8]



午後そういう採ったものを加工したり、あとは地域のお母さんに何か教わったりとか。だいたい6時くらいか、もうちょっと日が長い時だと7時くらいに、山の中に沈んでいく夕日が見えるんですね。すごく綺麗な時は「今日夕日綺麗だよ!」と夫に声をかけて、猫もついてきて写真を撮ったりしています。夜はゆっくり過ごして寝ます。

[9]



和歌山へ来ていいなと思うのは、勤めに出ていないので、夜が割と自由で、ゆっくりできること。街灯が少なく外が暗いから家に居たいというのもあるんですけどね。家で過ごせるのはいいなと思います。あと、地元の人と関わって、地域で暮らすことも結構大切にしていますね。たとえば亡くなった方を初めてお迎えするお盆を「初盆」といいますね。初盆の時はお家の前に提灯飾って、ろうそく108本立てて、夕方、地域の人みんなでそのろうそくが消えるのを見守って。昔は初盆のお家一軒一軒盆踊りで回ったそうで、そのぐらい地域の亡くなった人をちゃんとみんなで呼び戻す、お迎えする、送り出すってことをしています。60人くらいの地域だと、誰がいるか、元気かどうかみんなだいたいわかるんですね。だから山の上まで救急車がくると誰かが危ないんだとドキドキします。町に住んでいた時は、なんか近所に救急車が来たなというくらいだったんですけど、その距離感がなんか違いますね。

あとは、神社。今日は神社のお話が多かったですけど。高原には神社もお寺もあって。地域の人たちは崇めてる...大切にしているんですけど、そんな神様神様っていつているわけではなくて、みなさんお寺には墓があって、神社もお寺も暮らしの中にある感じですね。お祭りの時は、餅まきがあるので、前の日は餅を地域の人みんなで集まって作ります。たくさん餅をついて、丸めて。翌日餅をお祭りの最後に撒いて取りあう。あとは、神社のお掃除。月に2回。「1日と15日にお宮さんのお掃除よ〜」とみんなで言う場があったり。地域でやる仕事がここにはあります。そんな感じで暮らしています。

▶▶▶ DATA



田辺市

人口約74,000人。田辺市は、和歌山県の南部に位置。西よりの海岸部に都市的地域を形成しており、森林が大半を占める中山間地域が広がる。龍神温泉や湯の峯温泉などの温泉資源が市内各地にあり、世界遺産「熊野古道」や「熊野本宮大社」など歴史的文化的資源を多く有する。高原は別名「霧の里」とも呼ばれ、気象条件が揃うと眼下に広がる雲海を観察することができる。

## クロストーク

新宮市出身の熊野亭雲助さん、移住者の宇澤 聡子さん、川崎 由依子さんの3名をゲストにお迎えし、司会2名と共に、4つのテーマで熊野にある暮らしについて語り合いました。

### ① 命との距離



司会1) 畑を耕してそこから恵みをいただく。川の中には魚がいて、お花が咲いて、木々が芽吹いて。そういう命との距離感が近い暮らしって本当に自然な行為で自然に感謝することができるということを伺っていく中で、「命との距離感」っていうのが暮らしの中のテーマになってくるんじゃないのかなと。

司会2) 日々の暮らしの中で出会う命って、色々な命があると思うんですけども。四季というのが日本にはあって、特に春っていういろんな命の芽吹きを感じられると思うんですけど、その春のシーンで高原独特なものってありますか？

川崎) そうですね。春は、これから観光客の方も来て忙しくなる、これから頑張るぞという気合を入れる時期です。木々とかは、つぼみになってずっと動かなかった冬があつて2月ごろになると梅が咲き出して「あ～春くるかな～」って。下旬になるとフキノトウが出だすんですね。もうフキノトウが出たらフキ味噌して、おむすびしたい。

司会2) もうおむすび欲求が (笑)

川崎) そう。もう欲求が。「あ！フキ味噌！」と思いながら。ポコポコ、ポコポコ、フキノトウが出る。あ～フキノトウ、フキノトウっていっぱい採るんですけども、また出る。採りすぎるとなくなっちゃうけど、でも、お金も欲しいし。自分との戦い (笑)

司会2) 自分との戦いが芽吹きとともに (笑) 明日もフキノトウ、明後日もフキノトウ (笑)

川崎) そう！こんなにも答えてくれるっていうのをね。すごいなって感じますね。

司会1) 採りたい、でも残さなきゃいけない。命を次に繋いでいく視点って、きっと前の方がちゃんと残してくれたから、そこにはフキノトウがあるから、繋いでいくために全ては採らない。そういう考え方もすごくその土地らしさ、その土地で続いてきた暮らしが、なぜ続いてきたのかなのかな。そこがすごく素敵だな～と。

司会2) そうね～。宇澤さんは、このへんでイメージされることってありました？

宇澤) 私は移住してきたきっかけが震災で、やっぱり原発が事故おこして、地球を人類が汚しちゃって。そのことに対して自分自身、罪悪感があつて。そういうのも後押ししてくれて、自然との暮らしとか、自然の中の暮らしとかに入りたい！という欲求が湧き上がってきたというのもあるんですけど。実際、中途半端な自然よりも、ぐっと自然が欲しかったので熊野を選んだということもあると思うんです。その熊野という土地で暮らしはじめてみて感じることは、雨多いんです。この熊野川町っていうのは、熊野川があるからちゃんと氾濫もします。水害すごいです (笑) 相変わらず (笑) まあ、そういうところなんですけども、雨が降ると、滝があちこちに出現して、水量もパーっと増えるので、いつもの風景と全然違ってきて。それですぐにダイナミックに水流がだーっと増えて、いろんな山々の水を含んで、川がドーンと流れる。それが海に出て、プランクトンを発生させて、イルカ、クジラが集まってくる。そして、ここそこにも、どこそこにも温泉がポツカン、ポツカン湧いているっていうね。そういうダイナミックさを実際に住んでみて、体感するんです。そういう時にやっぱり感じたのは、「あ～地球はこうやって浄化していくんだな～」って。人間ごときが汚したって大したことないなっていう。勝手になんか「ごめんなさい」って思っていたけれども、いやいや全然大したことなかったなっていうくらいのダイナミックさが。熊野っていう土地は本当にね、命との距離、自然との距離がダイレクトなのだという感じはあります。

司会2) 雲助さんは住まれていて、改めて移住者の視点から熊野の命みたいなところを感じ取ってる話を聞いて、住み続けている側として印象だったりとかあつたりします？

雲助) はい。こつからね、ちょっと熊野弁で!!そやの～、やっぱり難しいんだけど、受け入れる側としたらのお、たくさんほんまに来てくれる人多いんですよ。多いんやけど、まずね、お二人のように非常に思い入れが強いという形できてくれるんやけども、僕ら灯台下暗しになってしまうんで、あんま、わからへんのですよ。どこがええんですかというところが正直あるんやけども。今日、お二人の話を聞いていたら、やっぱりホンマええとこなんやっつてね。命の話なんかもね、ほんまに何気ない話なんですけどもね、そやの～と。そういうことに気付かされますね。

### ② 土地に試される

司会1) 移住を受け入れる側の方にお話を聞くと、誰でも合うというわけでもないよという声があります。さらに、移住する側にとっても、やっぱり合う合わないがあるので自分が試されているなと思うような出来事に、移住した後の暮らしの中で直面すると。それは特に宇澤さんのお話を聞いていて思ったのですが。

司会2) そうですね、これ僕もう一個だけ前談いうと、最初僕ら土地に認められるっていう感覚かな～なんて思ってたんですが、そこを宇澤さんにご訂正いただいて「認められるだとなんとなくしっくりこないな～。試されている感

じ??」みたいな形で、今回のテーマが生まれたような経緯があります。宇澤さんちょっとそのあたりの話をお願いします。

宇澤) 熊野川町は熊野川が氾濫しますので、水害がほんと多いんです。うちのお店は2015年の4月にオープンしまして。「水害ちょこちょこあるみたいだけど、私のリサーチ的には7年に1回くらいかな」という計算だったんです。でも、まさかの3ヶ月後に浸水50センチ。「浸水前に買った電気器具、全部アウト〜?」みたいな。すごく皆さん同情してくださって、facebookでそういうのをあげたら助けに来てくださって。水害に慣れている地域っていうのもあって、皆さんそれぞれに水害に使える道具を持って来て、掃除を手伝ってくださって。私は何からどうしたいのかわからないので、ポカーンっていう状態でハーってなっていたんですけど、みんなが「それはこうやった方がいいんやよ〜」って言って全部やってくださって。その情景をぼーっと眺めていると、喜びがふつふつと湧いてきてね。

司会2) その状況でも(笑) 浸水しているのに(笑)?

宇澤) 顔がね、ニヤ〜つとしてきて。「笑うところじゃない、笑うところじゃない」って思うんですけど、なんかニヤニヤしちゃって、嬉しくて(笑) なんか、こう、3ヶ月しかやっていないのに、確かに常連さんみたいな人ができて、その人が一生懸命、窓とか拭いてくれて、なんか嬉しくて。お店にはまだ来たことがなかったけど、いつか行こうと思っていて、今日が初めてですみたいな人が来てくれたりだとか、なんかおかし、面白いな〜と思って。そういう感じで、一見すごいネガティブなことが起こるんですけど、ふわ〜って見ると、「え〜なんかめっちゃくちゃ面白いよ〜」とか「あ〜なるほどな〜」っていう事が本当にあって、こういう事が「聖地…、関係あんのかな〜」とか、「神様…?」とか色々考えるんですけど、どうやら土地のエネルギー的にも強烈なものがある。ごまかしがどうも効かない感じがあるんですね、どうもね。ふんわりごまかしていたことが、バシッと明るみになるような、そういう事が多々あって。熊野の神様、結構厳しいから、私たちも気を引き締めていかないといけないよねっていいながらやっている次第です。



司会2) まさに土地に試される感覚ですね。高原の方で、イメージとしてそういうのってありますか? 集落は本当に小さいし、みんな顔見知りなわけじゃないですか。でも、ご縁でいきなり地元の方に家を紹介されるみたいな事があって。なんとなく川崎家の場合は、1年の間でトントントンって進んだような感じがするんですけど。

川崎) あんまりないかな〜。でも!一年目にスズメバチが納屋に3回も巣をつくって、スズメバチどうするんだろ?って隣のお母さんに聞いたら、「強いスプレーかけて、叩けばいいんだよ!」っていわれて。「叩くんだ?!」って思って(笑)

で、それをやってもまた来る、また来るって(笑) そういう話があります。

司会1) 土地に試されるって特に田舎で起こるのかな。今ちょっとお話を聞いて思って。大自然って人間の力ではどうにもならないもので、都市の生活に慣れていたりすると、自然とか環境はコントロールされているから、基本的には想定内のことしか起きないんだけど、大自然に近い暮らしは、想定外のことしか起きなくて、それにどれだけ耐えられるかという。そういう事が試されているという、そういうことなんですかね。

### ③ 仕事のあり方

司会1) 仕事の定義が、都市と地方で違うんじゃないのかなってというのが、お二人もそうですし、いろんな移住者の話を伺いながら感じたことで。都市でいうと大量につくって、大量に消費するっていう社会の中で、自分は大きなシステムの中の一つのパーツとして、プロフェッショナルなスキルを発揮する。そこによって対価としてお金を得るとというのが、仕事。そう定義されていると思うんですけど、田舎ではそもそも消費の母数が少ないという、そもそもそんなに大量に消費する事がないし、畑仕事も地域の役割も仕事で、お金を得る事だけが仕事じゃないよねみたいな話がある。それって素敵な考え方なあって私は思って、仕事のあり方がお二人が都市で働いていた時と田舎でどう違うのかっていうところをお伺いしていきたいと思うんですけども。

司会2) あ〜面白いですね。川崎さん、今のお仕事はなんでしたっけ。

川崎) まあ、おむすび屋さんです。とはいいますが、ちょっとためらいがあるのは、おむすび屋だけで収入を得ていない。梅取り手伝いに行ったりとか、いろんな小さな仕事をやりつつ、それをやっている。田んぼの仕事、お米をつくるっていうのも大事な仕事だったり、草取りも大事な仕事だし。合間に、お手伝いしたり。

司会2) それがすごく印象的。取材に伺った時に、お二人に職業を聞いたら、旦那さんと奥さんが顔を見合わせて、「おむすび…屋…?」みたいなところが、実はものすごく本質的な会話だったような気がして、仕事のあり方っていうのは川崎さんの言葉を借りれば「地域って与えられている役割全部が仕事なのか?」みたいなところがなんか聞いて「ハッ!」としたんですね。僕実は、宇澤さんの経余曲折で今回で初めて聞いたんですけど、そのあたり、仕事のあり方、もう少しちょっとお聞かせいただくとありがたいなと。

宇澤) そうですね、私もね、子どもがいますね。「お母さん、なんなん?」って。まあサンサロカフェのオーナーというのがトップかな〜。あとは本当にいろんな事。ヨガの講師もその時まだいなかったんで、「あんた、できそうやん?」みたいなところから始まっているし、そっから自分である程度深めて行って、資格を取りに行ったり勉強しながら、まあ今はヨガの講師もしてますっていう状況にはなっているんですけども。ファッションデザイナーとか、企業で働いていた時はスペシャリストはスペシャリスト、専門職という事でぎゅーっと深く掘っていくことで、収入もある程度もらえるようになるので、深めていきますけど、いきなり田舎に来た途端、そういう仕事は一切ないし、ポンと放り出された時に、なんとなくできそうな仕事を。「あんたヨガできそうやん」「あんたちよつと弁当つくってや」とか「あんたちよつとこんなやつや」って。カフェもそうです。「あんたここ場所あるし、カフェやったら?」という感じ。「う〜ん、できるか…、まあやるか!」みたいな感じで、とりあえず、投げて来てもらった事に対して「やるか!」って感じですね。なんかそういう感じで全部をやり

でしたんですけど。そこに元から持っている自分の経験だとか、もともと持っているクリエイティブな感覚とか、そういうのを入れながらより楽しく自分が喜べるように、人に喜んでもらえるように今こうやっているという感じで。でも本当に仕事なんですか？といわれたら「私自身かな」という感じで、そういう感覚がありますね。

司会1) 雲助さんも同じだなんていうふうに思うんですけど(笑) 今もね、市役所の中で働かれているという側面もありますし、今日みたいな落語家さんとして、登場する事もありますし。きっと地域の中の役割も持ってらっしゃる。地域の仕事ってどうなんでしょうか。色々なところから得るもの全てが仕事っていう。

雲助) 今の質問ですけどね、こんなも自分自身がわけわかりませんで、未だに(笑) ただ、現役時代、名刺だして「新宮市役所何々です」って。最初はね、名刺受け取ってもらって、話をしていますけど、大体こんな雰囲気でしょ？途中で「ほんまに公務員さんですか？」ってよーいわれました。

司会2) でしょうね～

雲助) なんちゅーか、ほんまに公務員としては、なかなか見ていただけなかったです。公務員にもいろんな職種がありますからな。僕みたいな人が一番適材適所なんが観光やったりやと思いますけど、そういう中でいいますと、私の趣味というか、ライフワークというのが落語。皆さんの前に出て、できるだけ面白い話をして楽しくさせていただくというのが合ったんでしょうね。だから公務員といたら、ガチガチの硬い硬いそういうイメージを皆さんお持ちですが、まあほんまにこういうのもあるっていう。ほんで今は、とりあえず肩書きなんて一切ございませんから、もうとりあえずチャンスがあれば、どこにでも行って、面白い話だとか、熊野の話だとか、頑張っている人たちといい加減ではございますが、コラボさせていただいてどこにでも行ってしゃべりたいなと思っています。こういうわたくしでごめんなさい(笑)



司会2) いろんな三者三様の仕事のあり方っていうのが見えて来ますね。

#### ④ 移住は哲学？

司会2) ここなんですよ。先ほどの仕事のあり方からちょっと思い出した事がある。川崎夫妻にゲストをお願いしたいって話をした時に、「私たちが移住で成功しました!みたいな見え方ではなくて、私たちでも移住できたんだよ!っていう話をできたらいいな～」なんていう話を思い出して、「哲学～?!」みたいなところに集約していければと思いました。

司会1) この「移住は哲学」、雲助さんとお話して感じて事で、移住した人は自分がどんな暮らしをしたいかっていう事を考えて、行動する。自分が住んでいる場所を移すって行動をしているので、暮らしに対する考え方が深い人たちが多いんじゃないかと。そんな中で移住した人たちって暮らしに対して何かしら哲学を持っている人たちなんじゃないかって。

雲助) 移住してくれる人、来てくれはった人っていうのは、先住民からすればですね、「こんなとこええの?」「なんでこんなとこ選んで住むの?」みたいな気持ちがあんねん、灯台下暗しやから。だからそこをこのお二人の様にするね、ピピッと感ずるものがあるって、「いやいや、あんたらには分かんないのよ!」っていうとこを気づかせてくれるわけです。でも正直ね、田舎に行けば行くほどやと思います。移住して来た人たちが「よそ者来た!」みたいなところはやっぱり未だにあると思います。でもそこはやっぱりお二人見たら分かりますけど、芯が強いんですよ。やっぱり別の場所に移住するってことは。川崎さんの方がビクビクしてます様に見えますけど、むちゃくちゃ芯の強い人やと思うんです。

司会2) うん、どうですか旦那さん、そんな感じですかね!

雲助) 芯強い、芯強い、芯強い!水不足の米みたいな!(笑) 宇澤さんなんてね、今おとなしくしてまますけど、昔は大阪のヤンキーの姉ちゃんみたいなもんです(笑)。ほんまに!やっぱりね、芯が強いというか。そういう方なんです。せやから田舎に住むってことに、めげずに「せやけどな、おばちゃん、せやけどな」みたいな感じで入ってくと、いつかは必ず仲間になりますよ。つまり、移住は哲学。「移住するぞ」という時点でね、ほんまもう哲学者ですわ。僕らでは考えられへん。世俗のものでは考えられへん。せやから哲学だと思えます。

司会2) なるほどね～、どうですか、受け入れサイドの雲助さんから、僕はなんかいい言葉に聞こえたんですが。感じられたことでも。

宇澤) 哲学あったかっていうと「そんなないわ～」っていう感じなんですけど、でも、思い返してみると、自分を後押ししてくれたのは、日々の中の、小さい小さい違和感。小さい違和感を無視しない。初めは小さかったんですけど、無視できないレベルになって来て、そういうところに目を向けた時に、後押ししてもらって。素敵な世界に押し出してもらったって。だから哲学っていうもんじゃないけど、私の中で今の一番大事にしているのは、自分の中の違和感。それは今も大事にみる様にしています。

司会2) 川崎さん、小学校3年生の時の違和感でもいいですけども…(笑)。

川崎) 違和感…があってもそれが蘇ったのって、やっぱり働いてみて。家に帰るけど、その地域に暮らしていない。職場と家が別の地域だったんですけど、暮らしがなかったんですよ。それに違和感がある。なのに地域活動をしているけど、自分の暮らしは空っぽでっていう。そこに私は違和感があった。だから「地域で暮らす」って私の中でキーワードなんだなって聞いて、振り返ってました。そこに仕事があるって、暮らしがあるって。そうすると、しおれた米でもググッと根を張っていく感じが落ち着くんだなって思います(笑)。



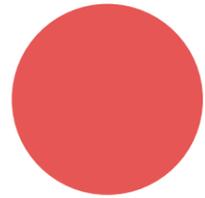
司会2) 違和感っていうものに気付けるかどうか。人それぞれスキルとしてもあるんだけど…。

司会1) なんとなくみんな違和感を感じているのはあるんだけど、そこに対して、正直になれるかどうかって、色々な制約があって、家族のためにとか、稼げるかとか。そこもすごく大切なことだけど、自分はその根源的な欲求として、どこでどう生きていきたいのかみたいな、心の声に少しずつ耳を傾けて行った先に、行動を起こしていくと哲学が生まれていくのかな。

司会2) 先に哲学を持ってそこに移住するというよりは、生まれてくるものなのかもしれないね。



( 終わり )



## 暦とおむすび

自然、歴史、文化、そして、暮らし。ここまで語られた話を全て「結ぶ」存在が「おむすび」です。土地の恵みを、受け継がれてきた文化を、むすぶ。季節の移り変わりに合わせておむすびを結ぶ「おむすび暦」をされている川崎さんに、暦とおむすびについてお話いただきました。

イメージしてくださいね。私の家があります。左手におむすび屋さん。目の前に熊野古道。そこにあるのがタブノキ。クスノキ科の大木で、「昔は線香の材料になって、この葉っぱを採って下の方まで持って行ったんだ」とお隣のおじいちゃんはいっていました。タブノキは常緑樹で、昔来た人たちは熊野の山で常緑樹が多いので、冬でも山が青く、生命力を感じたともいわれています。それで家と仕事場が同じ場所なので、だいたい家周辺にすることが多いのですが、1年間同じ場所にいると、太陽のとおり道が変わってくるのがわかるんですね。夏だと木の上の方をぐーっと通っていたのが、冬だと木の枝葉のところを低く動くので、家に日差しが入ってこない。田んぼをやっていると夕日が沈むから帰ろうってなるんですけど、田植えの頃と稲刈りの頃では沈む場所が変わってくる。「太陽ってこんなに違う場所を通ったんだな」って暮らしてみてもやっとなりました。

そんなところから暦、旧暦に興味が出て、学びました。暦って元々、「日を読む」、「日読み(かよみ)」というところから来ています。今の暦は、グレゴリオ暦って言って、新暦と呼ばれるもの。太陽暦ですね、太陽の流れを追っていくもの。旧暦というのは、太陰太陽暦って、月の流れと太陽の流れ、両方を追っていくものになります。年月日の年から行きましょうか。おむすび暦のシートを見ていただくと真ん中に太陽がいます。この太陽の周りを地球がぐるりと一周するのが1年。年という字の成り立ちは、鎌の形から来ていて、1年に一回お米が獲れましたという意味ですね。地球がグルッと回ってる、そんな感じ。

次は、月のお話。地球の周りをグルッと月が一周回る。新月、満月、そしてまた新月になる。新月の頃と満月の頃は大潮(海の流れ)になりますね、半月の頃は小潮になる。月の動きは、水の動きになります。たとえば、満月だと大潮で海の中がいっぱい動く、すると魚の餌となるプランクトンも動く。そうすると「魚がいっぱい採れるから、満月は魚にしよう」となります。あとは、木の伐採とかもそうですね。冬の方が水を引いているというのと、新月の時は木の油分がよく出るみたいで、虫がつきにくい。なので、秋冬の新月の時、水が少ない時、油が出ている時に、木を切ります。桶屋さんも桶を留めているタガの部分の竹を取るの、秋冬の新月の時に行っています。満月の日は、出産。亀とかサングとかもそうですね。人間もそうですね。あと、月経も漢字そのまま、「月を経る」ですね。お祭りも、満月の夜にやることが多いですね。そうやって月の動きを意識しながら、いろんな仕事をしていました。

今度は日の動きを見てみましょう。日の動きってというのは、地球の自転ですね。地球自身がグルッと回ると1日過ぎます。365回回ると、大体1年になる。ぐるぐる地球自身が回りながら、太陽の周りを大きく回っていく。自転と公転をしています。1年の中で太陽の出ている時間の長さは変わります。これは今の太陽暦で残っているのだからわかると思いますが、二至二分。一番太陽の力が強い時って皆さんわかりますよね？夏至。逆に弱い時は冬至。二分は春分と秋分。この日は、1日のうちで昼と夜が半分ずつ。夏至の時は大体2時間半昼が長い。冬至の時は、夜が長い。

さらに、季節の始まり、立(りつ)ってこのを見てみましょう。立(りつ)は年に4回ありますね。立春、立夏、立秋、立冬。二至二分と立を合わせると8点ありますが、立は季節の始まりを表すので、8月7日の立秋から暦の上

では秋に入る。案外早い。やっとな秋めいたかなと思うのは9月に入ってからですよ。春のフキノトウの勢いに追いつくためには、2月4日の立春に春が来たというのを意識して準備態勢を整えていく。気持ちの面でそこから春なんだよと意識していく方がスムーズに暮らせるなと思っています。

次は二十四節気について。今8つに分けましたが、さらに16個足して、季節を24個に分けたものを二十四節気といいます。昔の人は面白くて、季節の「節」とか二十四節気の「節」、他にも雑節という二十四節気には当てはまらない、農事、農の仕事をするのに必要な「節」があったり、節分、お節(せち)料理など、節目というのをすごく大事にしていました。その節目というのは、「カチって終わるものじゃなくて、そこが終わりかけても、重なるように新たなものがまたあとに続く」感じですね。これは結構「魂は死んでしまうけど、また次もあるよね」という信仰に似ているのかなと感じます。そういう節というのをすごく大事にしていました。

雑節を詳しく見ていきたいと思います。5月2日は八十八夜。これはお茶摘みの歌で有名ですね。八十八夜の頃ちょうど私が住んでいる高原でもお茶摘みですね。八十八夜は、88回夜が来たよということですが、いつから88回かわかりますか？これは立春ですね。スタートが立春。迎春というのも2月に梅が咲くというのを思うと、年賀状の迎春もしつくり来ると思います。あと面白いのは、地球は太陽の周りを1日1度くらい動いて1周するわけですが、八十八夜は90に近いので、立春からだいたい90度くらい太陽の周りを回ったということにもなりますね。私たちは同じ場所に住んでいるけれど、宇宙の中では毎日だいたい1度ずつ太陽の周りを巡っています。

次は、6月1日入梅。だいたいその頃に梅をとって夏の土用に干しますね。有名な夏土用は、立秋の前の18日間のこと。本当は年に4回、各立の前に土用があって、次の季節に備えましょうという期間になっています。

あとは、9月1日に二百十日というのがありますね。これも立春から数えて二百十日。200回も数えたんだと思うと驚きます。地域でそばを撒いていると、地元のおばあちゃんが「二百十日の頃に花が咲くとうまく育つよ」と教えてくれました。その頃の私は二百十日を知らなくて、何だろうと思っていたら、この雑節のことだったんですね。「暦の間隔に合わせておばあちゃんは暮らしていたんだな」というのを感じたエピソードです。

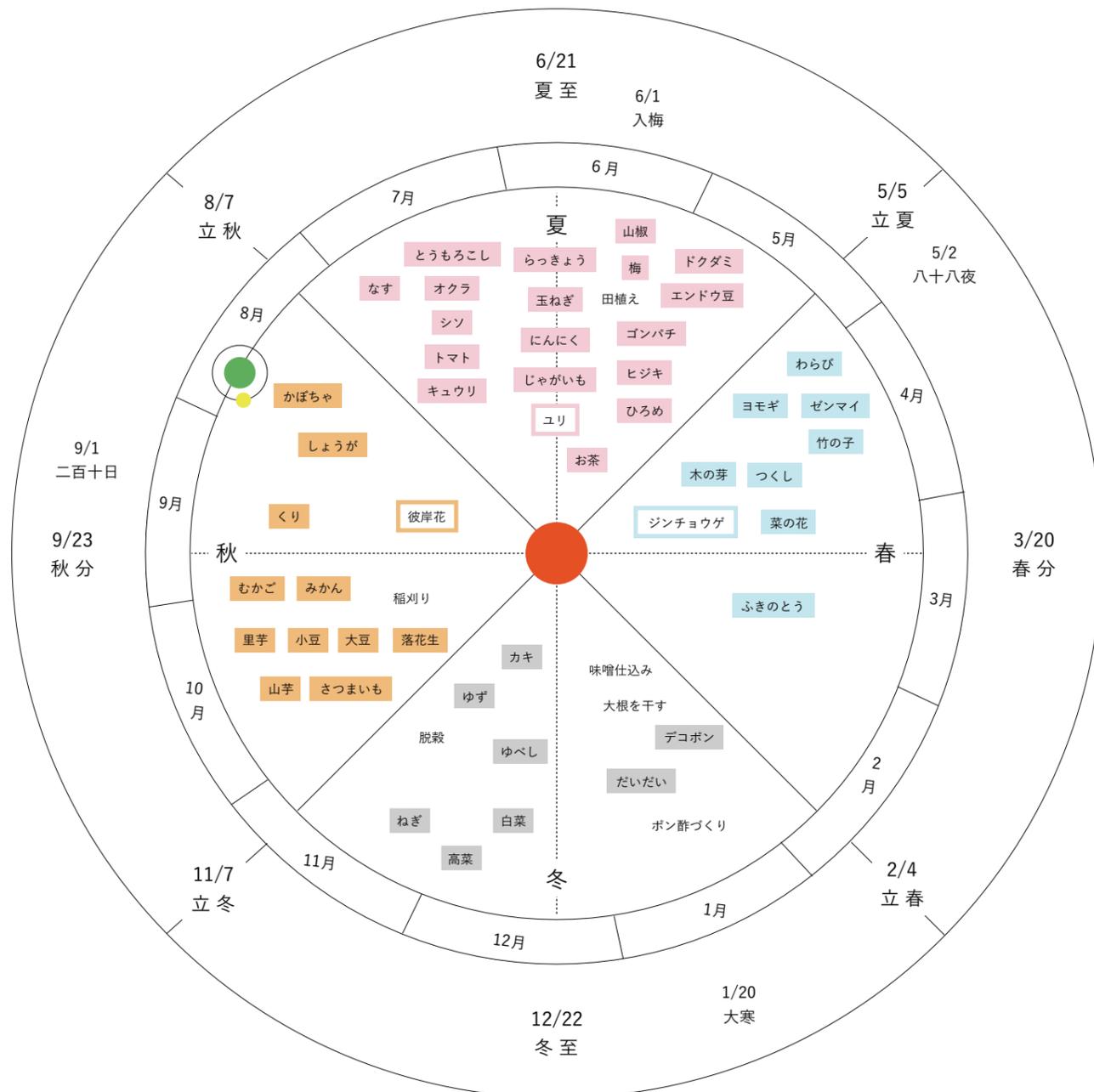
冬場になると、ゆべしをつくったり。あとは、この辺りで有名な「めはり寿司」という高菜でまいたおにぎりに使う高菜を漬けたり、大根を干したりしてます。

あと、二十四節気の中の、1月20日の大寒は、1年の中で一番寒いといわれる時ですね。「大寒には、水を汲んでおくといいよ。その時の水は、傷みづらいから。あとお薬飲む時に使うよ」と教えてもらったので、水を汲んでます。こうやって季節が巡っていく。季節が巡っていくとその中でいろんな実のりができる。巡りの中でできる実のり、だから「恵み」ですね。

そういう恵みをいただきながら、結んでいるのが「おむすび」です。昔の人は「日(火)」と「水」をすごく意識して暮らしていました。それは言葉のいろんなところに残っていて。みなさん、左手～、右手～!を合わせます。左手の「ヒ」と右手の「ミ」が合わさりました。「ひ」は「か」とも読みますね。これで「かみ」。祈りですね。そんな感じで。(笑)これも本当にそういう意識があつて、結びも同じですね。「むす」という言葉は、「うむす」といって、生産するとか、人間ではできない力で生み出すこと。結びの「び」は魂といわれますね。なので「むすび」は、魂を生み出すこと、命を生み出すことといわれています。だからおにぎりじゃなくて「おむすび」といういい方がいいなと。

今日つくってきたのは「黒豆と甘酢ショウガ」のおむすび。季節の巡りによって頂いた旬の恵みは、地域のお母さんが育てた新生姜です。ちょっと早いんで

すけども、今回イベントがあるので、頂いてきました。その新生姜とともに結んでいるのが、田植えも稲刈りも脱穀も、足踏み脱穀でやって…と手作業でつくった高原のお米。黒豆は別のところのものですけど、お塩は和歌山の綺麗な海で友人が汲んで炊いたもので、結んだおむすびです。この前有名な映画でもありましたけれども、「噛む(カム)」というのも「かみ」が語源です。噛むことで、分解、発酵されて、命になっていく。なので、みなさんよく噛んで、お召し上がりください。



## 高野にある暮らし

臨床的、科学的に効果が立証されており、世界的にも注目を集めているマインドフルネスは、仏教由来の瞑想法です。ここに意識を集中するという思想は、自分が大切にしたい思いの真ん中に自分を戻してくれる、そんな文化でもあります。自分らしい暮らしを実現している移住者の声から、高野にある暮らしを探っていきます。

### 高野概論



出典・参考：空海のこころの原風景 / 村上保壽 / 2012 / 小学館、高野山 / 松永有慶 / 2014 / 岩波新書、男の隠れ家 特別編集 時空旅人 vol.20「空海が創った密教の聖地 高野山 1200年の史実」 / 2014年7月号 / 三栄書房

#### 『宗教都市・高野の輪郭』

高野山は海拔約900メートル前後の、東西6キロ、南北3キロ弱の盆地になっています。周囲がさらに高い山々に取り囲まれている地形から、内の八葉、外の八葉の蓮華の花びらのような峰々に取り囲まれたこの世の浄土であるという信仰が古くから伝えられてきました。八葉の蓮華とは、真言密教の教理の精髓を絵画化した胎蔵界曼荼羅の中の中央部にある中台八葉院の名に由来します。内の八葉は高野山の伽藍周辺の比較的低い山々から、外の八葉は海拔1,000メートル近くの山々からなります。そのため、下界を見下ろすことができず、俗世から隔離された天空の都市として、僧侶の修行の場、祈りの聖地として、民衆の間で受け入れられてきました。

#### 『密教と空海』

仏教は、今から2,500年ほど前にインドで生まれた釈迦牟尼を開祖とする宗教です。高野山を密教の聖地として開山した弘法大師・空海は、中国に渡って密教を学び、真言密教の教えを広めるために「真言宗」を開きました。密教とは、仏教の中でも中期から後期にかけて展開された教えであり、真言とは、仏の真実の「ことば」を意味しています。この「ことば」は、人間の言語活動では表現できない深い意味（隠された秘密）のことで、それを明らかにする教えが空海のいう「密教」とされています。自然界に靈魂（アニマ）の存在を感じ取る思想をその根底に宿しており、空海は高野山の自然を通じ、聖なる靈的のこの存在（大日如来）を感じていたのかもしれませんが。

#### ▶▶▶ Speaker



話し手：森本 一彦  
高野山大学文学部 准教授  
高野山大学文学部准教授和歌山県高野町生まれ。『高野町史』民俗篇を執筆以降、政治・経済・信仰の重層性を持つ高野文化圏の研究に取り組んでいる。地域文化圏の再興こそが東京一極集中を打開し、地域を維持するための手段であると考えている。

#### 『高野について』

高野山大学の森本です。高野山大学で民俗学とか社会学を教えておりました、高野山の研究よりも周辺の研究を主にしております。最後その辺までお話できたかと思います。お引き受けした時に「高野山」ではなくて「高野」と書いてくれているのがいいと、思いました。高野山というと、そこだけを集中的に指している感じがするんですが、「高野」というとふわ一つと周辺も含んでいる感じがして、私自身は「高野」という呼びの方が好きです。

高野山は、紀伊半島のちょうど真ん中にあります。絶妙の位置だと思います。よくぞ、ここに、という感じですね。紀伊半島の東側が伊勢で。あまり知られていないんですが、和歌山市内に、日前宮という神社があります。この神社は伊勢神宮と匹敵するぐらいに重要な神社です。その真ん中に高野、その向かいに吉野があるという位置どりになっています。それから、南北でいうと、南の熊野と北の京都のちょうど真ん中ぐらいの位置にあります。和歌山は「木の国」ということで、古代からヒノキとか楠の産地として知られていました。雨がが多く、高野山自体が水源地になっており、霊山の信仰とともに、水源地信仰もありました。世界遺産には、霊場と参詣道が指定されています。それから山岳宗教であるということが、非常に重要でしょう。非常に神秘的な雰囲気を持っているということですね。

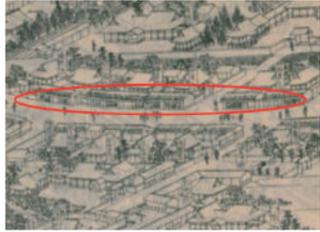
高野山はいつ誰が開いたかということですが、816年、嵯峨天皇が弘法大師に高野山を下賜しました。弘法大師・空海について、あらためてお話することもないんですが、なぜ高野山をつくったのでしょうか。国家の平和、あるいは人々の幸せを祈るということを、高野山を通じて発信していたということですね。それから中国で密教を学んで、いろんな知識を身につけました。それこそ弘法大師が持って帰ったといわれるものは伝承上ですけど、すごくたくさんあります。土木建築だとか、薬だとか、暦だとか、いろんなものを持って帰っており、日本文化にすごい影響を与えているのだと思います。それから、その中で即身成仏という仏教、その時代の最先端の考え方ですね。即身成仏、そのまま仏になれるという考え方。仏というと死んだ人のイメージがありますが、実はそうではなくて、悟りを開いた人のことがブツダ、仏なんですね。長い修行をしなくても瞬間に、仏になることが可能だというのが、弘法大師の一つのアイデアというか、中国から持って帰った考え方だったかと思います。

それから池をつくるなど社会事業も随分おこなっています。そういう意味では、弘法大師が持ち帰ったものを、1,200年間後継者たちが温めて高野山という町をつくっていったのかなと思います。高野山という山はどこにあるのかとよくいわれるんですが、そんな山はありません。そういう名前の山はなくて、高野山は寺の山号なのです。高野山自体、金剛峯

[1]



[2]



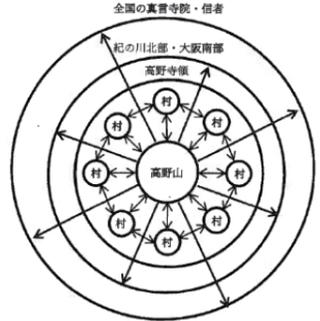
[3]



[4]



[5]



▶▶▶ DATA



高野町  
人口約3,300人。緑豊かな山々に囲まれる、歴史・文化・自然が融合した地域。世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」として登録された高野山がある。知るほどに深く、暮らすほどに温かい町。

寺というお寺なんです。今、高野山に行かれたら町が広がっていますが、昔のものがいっぱい残っています。全部が寺なんです。伽藍といわれる弘法大師が最初につくった場所から町が広がっていきます。町の右上の方に御廟で、弘法大師が今でも瞑想して、生きているという信仰があります。宗教都市・高野山は、もとは寺だったのです。それが町になったというのが正しいのだと思います。

850mぐらいに高野山の町が存在し、周辺を1,000m級の山に囲まれているという。ちょうどハスの花のようです。「はちよう」という言葉がありますが、ハスの花の真ん中に高野山という町が存在をしています。麓から町に至るための道標である『町石』。麓から高野山の伽藍まで180本の道標がたっています。これがまた良くてきています。密教では『曼荼羅』と言っていますが、その世界を表しています。町石の一本、一本が仏になっており、いわゆる「胎動曼荼羅」を表しています。『曼荼羅』の中には180の仏が描かれています。伽藍から奥之院には36本の町石が立っています。これは「金剛界曼荼羅」を表しているといえます。このように高野山は、宗教的な装置が見事に配置され、本当に完成した環境をもった町です。

江戸時代に描かれた絵 [1] です。数珠屋さんの絵が描かれているんですが、これだけ見ると町が広がっているなと思いますが、よく見ていただくと、[2] 実は寺だということが分かっていただけます。『築地堀』の一部分がくり抜かれていて、今も厚い壁がお寺に張り巡らされているんですが、そこがお店になっているんです。基本的には寺だったということです。江戸時代の高野山の絵図を見ていただいても寺しかありません。それが明治以降、潰されて、現在の町家が建っているという状況です。ですので、明治以降、高野山は境内地から地域へと変化したのです。弘法大師は、高野山を修行の場、学問の場としてつくっていったのですが、明治以降には一般人が住みついたのです。

高野山が世界遺産に指定された理由というのは何かというと、実は神仏習合の考え方が評価されたからです。仏と神が一体化して、仲良く融合しているというところに意味があるんです。先ほどの映像でも紹介されていましたが、御弊納めという大晦日の行事です。龍光院というお寺から出発して、御弊が神社に納められます。そのときに松明が先導するんですが、高野山の中心にある伽藍というところには「御社」という神社があって、その前にお坊さんも、それから一般の方もみんな集まって、般若心経を唱えます。神様の前で、お経唱えているという、こういう姿がいたって普通の状態で存在しています。弘法大師も最初に御社をつくったという風に伝えられています。

高野山は真言宗の拠点ではありますが、それ以外にも山岳信仰だとか、霊が登る山だとか、西国巡礼の番外であるだとか、さまざまな信仰の重要なポイントになっています。四国遍路は、お参りが終わると、お礼参りということで、奥之院の弘法大師にお礼に行くということになっているんです。さらには納骨儀礼です。納骨の習慣がよく残っています。周辺では天野の丹生都比売神社で御田（おんだ）という行事が行われており、その周辺でも同じ行事が行われています。また高野町や九度山町では、お盆の行事として「鬼の舞」や「傘鉾」といわれる行事が残っています。

江戸時代以前の高野山の出生率は0でした。これは女人禁制だったからです。そのため、高野山に通じる道には女人堂が建てられ、女性はそこまでしか立ち入ることができなかったのです。女人堂は、現在一つだけしか残っていません。これが昔の写真 [3] です。今は全然違うんですが、高野山の町並みは結構変わってきているのです。そこもちょっと気をつけていただきたいところでもあります。

人と物からみた高野山という視点から考えると、高野山は誰も生まれにくいところだったんです。人が外からどんどん入ってくるという形で存続しました。産業の面で考えると、農業をすることができませんでした。そのために周辺からいろいろな物資が入ってくるによって維持されたのでした。参詣者もどんどん入ってきました。先ほどお話ししたいろんな信仰が、高野山で交差しました。

実は物も外から、人も外からということだと、高野山は田舎で自然豊かですと言っていますが、私自身は完全な都市だと思っています。東京もそうですよね。出生率が低いし、物も外からしか入らないという。それのもっとも完成した形態が、高野山であったということなんです。もう途絶えましたが、周辺の村から毎月決まった日に野菜を高野山に納めるという信仰もありました。「雑事登り」 [4] というものです。「雑事」というのは中世の税金です。年貢以外の税金という意味なんです。そのような言葉が残っていたのも高野山の特徴だろうと思います。いわば中世的な要素が残っている地域だと思います。

江戸時代の高野山寺領は、高野山周辺の山間部ですが、中世は海の方で高野山寺領が続いていました。江戸時代に縮小して、山の中だけが高野山寺領になりました。高野山周辺の山間の村々が、高野山を支えていたのです。私は『高野文化圏』という言葉を使っています。江戸時代には、高野文化圏は支配圏であるとともに、経済圏、文化圏、信仰圏が重なり合うという非常に面白いところだったとのことです。江戸時代になると、戦国大名は近世大名に変わります。そのために、ほとんどの地域では中世の文化が途切れてしまいました。ところが高野文化圏は、平安時代からずっと高野山寺領でしたので、そのままではにしろ中世的な生活文化雰囲気が残っているというのが特徴だと思います。高野山を中心にしながら周辺の村々が、分業体制をとっていたということが、私は大事だと思います。図で書くところという感じです [5]。

高野山が中心に位置しており、その周辺に高野山寺領があって、さらにその周辺を取り巻く形で大阪の南ぐらいまで高野文化圏だと考えています。さらに高野山真言宗の寺院を介して、全国にも繋がっています。東京の品川にも高野山真言宗の東京別院があります。高野文化圏が繋がっています。是非とも一度、高野山に来ていただきたいと思います。それから、移住定住を考えておられるなら、高野山よりも、その周辺で高野山を支えていく人になっていただくことをおすすめします。

## 自分の真ん中に戻ってこられる暮らし 1

▶▶▶ Speaker



話し手：佐藤 妙泉  
地域おこし協力隊

兵庫県出身。埼玉県から高野町へ移住。高野町地域おこし協力隊として、和歌山、高野町の魅力を紹介しながら、地方と都市をつなぐ架け橋となるべく情報発信活動を行なっている。協力隊としての活動に加え、長年の念願だった密教の研究のため、高野山大学大学院文学研究科修士課程密教専攻にも所属。2017年6月には、自身が取材・編集した「お大師さまの息 ～高野山の伝統産業をたずねて～」を発売（高野町発行）。

[1]



[2]



[3]



[4]



“手を合わせる”というお話があったので、最初に手を合わせてみますね。みなさん、こんにちは。これからお話させていただくことを聞いていただいて、高野山に行ったことのない方が「じゃあ、高野山に行ってみようかな」と、思ってくださったら嬉しいです。そのくらい気軽に聞いて頂けたらと思います。

私は1年半前まで、23年間、首都圏で働いていました。仕事をして、子育てをして、普通の暮らしをしていました。2015年8月8日、私は高野山の玄関口といわれている大門<sup>[1]</sup>の前にいました。大門は特別な場所で、大門の中は聖地、大門の外は俗なる世界だと考えられています。私たち密教を学んでいる者は、たとえば車で高野山に上がった時も、大門のところまで来たら手を合わせるというような神聖な場所なんですね。8月8日大門の前に立ったとき、「この場所には光がいっぱいあるな」と感じました。写真にもたくさん光が写っていて、「あー私、もしかしたら将来ここに住むようになるのかな」って、その時、思ったんです。その時は、まだ移住に向けて具体的な行動をおこすということはなかったんですが。

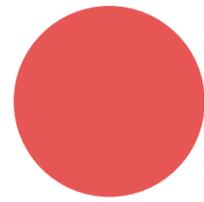
ところで私の出身地は兵庫県姫路市で、つまり関西生まれなんですね。関西には高校卒業まで住んでいて、その後は、一時福岡に住みましたが、22歳頃から東京で仕事をすることになりました。ふるさとにいたのが18、9年くらいで、東京には23年ほどいたので、東京生活の方が関西での生活よりも長いんですね。だから、関西出身なのに同じ関西である和歌山県の高野山には、その時まで行ったことがなかったんです。もしかしたら赤ちゃんの時に祖父に連れられて行ったかも知れないですけど、そういうのは、はずして考えたら、高野山に行ったことはその時までなかったんですね。はじめて高野山に行って、光がいっぱいあるなと思って、ここで暮らすことになるんじゃないかなと感じたインスピレーションが、2016年4月に現実になりました。総務省が地方創生事業の一環でやっている「地域おこし協力隊」という制度（地域外のおもに都市部から移住を希望する人材を受け入れて、地域貢献活動を行いながら、3年後にはその土地で起業や就職を目指し、定住・定着を図る取り組み）があるんですね。高野町役場もこの制度を採用してまして、協力隊として高野山内に住むようになりました。高野山に来て最初の印象は、とにかく水がきれいでおいしくて、お風呂に入るとつるになるし、お米もおいしく炊けて嬉しいというものでした。

高野山はもともと、真言密教の修行の道場なので、仏教や神道でつかう掛け軸や教本、建物やお堂をつくる堂宮大工さんなどの職人さんたちが、お寺の中において仕事をしていたという時代がありました。現在は業種ごとに独立していますが、今でも高野山に残っている職種があります。その産業を地域資源として高野山の魅力を内外に伝えるということが、私が採用された地域おこし協力隊の仕事の一つ（高野ブランド創出事業）だったんですね。この写真<sup>[2]</sup>は、ちょうど1年くらい前に伝統産業のPRのために参加したときのものになります。木工や塗香、線香、などなどの産業を紹介しました。私の背後にあるのは『宝来』（ほうらい）といって、高野山ならではの切り絵なんですね。これは、しめ縄の代わりに使われたりもするので神棚の前にかかっていたり、高野山に行ったらいたるところでみられます。お土産ものとしても人気があります。『宝来』には、5つぐらい代表的なデザインがあって、『宝珠（ほうしゅ）』（仏様が手に持っている願いを叶える宝の珠）という光の珠のデザインや、干支のデザインなど、いろいろあります。こういったもののPRも一つの活動になっています。

この仕事は3年間の採用で、任期が限定されている仕事です。国としては、3年間住んでもらって、そこでなんらかの生業をつくって、定住してもらってというのが目標なんですけれど、先ほどもお話があったように、高野山はひとつのお寺ですから、高野山の中で新たな仕事を創出するっていうのは、大変ハードルが高いなと思ってます。ただ3年間もいると、いろいろなところとネットワークができてたりもしますし、まだまだ高野山で研究したいこともあるので、任期の3年経過後も、高野山に残れたらという気持ちで、今は過ごしています。

というのも、私にはもう一つ、協力隊という仕事の他に、高野山大学<sup>[3]</sup>の大学院生という顔があるんですね。高野山大学で学ぶということが、実は10年くらい前からの私のちょっとした夢だったんです。密教って、皆さん、わかりますかね。弘法大師の教えを学問にしたもので、高野山大学は空海の教えを学べる場所です。10年前から高野山大学に、なんとなく行きたいなという気持ちがあったんです。これまでに願書を3回ぐらい取り寄せたことがあったんですが、その度に高野山大学へ行きたいけれど、仕事もあるし、子育てもあるし、無理だっという風に諦めていたんですね。一回目は2006年、2回目は2012年、3回目は2015年。願書を出したのが2015年でした。それまでの一つ一つの思いの積み重ねで決まっていくものもあるのかなと感じますね。「塵も積もれば山となる」という言葉の元になるものが、弘法大師の言葉にもあるのですが、小さな塵でも集めれば、みんなが見上げてやまないほどの巨大な山ができる。そんなようなもので、何かへの思いも、少しずつ少しずつ、それを忘れさえしなければ、実現する。夢の種を撒いておけばいつか叶うのかなって思ったエピソードです。

念願だった高野山大学院にも入ることができて、いま修士2年目に入って、修士論文を書いているところです。お仕事もみつけることができ、住む家も大門のそばにみつけることができました。いま振り返ってみれば、高野山内に家を見つけたことって、そんなに簡単ではないですよ。けど、その家がいまは学生たちの溜まり場になったりもしていて、



[5]



楽しく毎日を送っています。みんなが修行がおわった合間とかに、こんなふうな宴会して [4]、密教のこと、これからのこと、日々の辛いことや楽しいことも、たくさん、いろいろなことを話し合う場をつくっています。「お経の会」という名前がついているのですが、この会を定期的に行えるような一軒家を借りて住んでいます。

こんなふうな高野山の中で過ごし始めたら、いろんなことが起こりはじめて、お経を唱えるのも好きになりました。今の一般社会でいうと、お経ってお葬式とかでしか聴く機会がないでしょう。わけのわからない言葉の羅列みたいものに、多くの人からは思われがちですけど、一つ一つの言葉にちゃんと意味があるんですね。また、言霊というような感じで表現されることもあります。お経にはそれ自体にパワーがあることがよくわかりました。まだまだ私の集中力が足りない、修行が足りないっていうのもあるんですけど、唱えているときに私の精神はいろんなところ飛んでいって、例えば、今まで東京生活が長かったから東京の有楽町のガード下や、前に住んでいた東京と埼玉の境にある和光市に飛んで行ったり。ふるさとの姫路にいたり、今までいったことのあるいろんなところに心が飛んでいって、お経は唱えているんですけど、唱えながらも心は飛んでいって、その日1日、そこにいらっしゃる方々の今日1日の幸せを、お祈りします。不特定の、自分ではない他の人たちのために祈ることで、自分もより充実する、そういうことが身をもってわかるようになりました。人のためについて言っただけで自分を犠牲にする精神でやっているわけじゃなくて、そういう祈り方をすると、1日のはじまりがいい感じだなと感じていて、お経を唱えるのが好きになっています。三ヶ月前の自分ともまったく違って、自分自身がこれからどうなるのか、本当にわからない感じています。

[6]



これ [5] は荘厳 (しょうごん) というものです。仏様へのお供えですね。燭台があつて、ろうそくがあつて、花瓶があつて。ほかにも塗香 (ずこう)、水が置かれています。奥にあるのがお釈迦様です。ここは床の間なんですけど、お経の会の学生さんたちと、この仏壇でお経を唱えています。もちろん、本当の仏壇ではないんですが、私たち学生たちが、それもどきでやっています。この前でみんなでお経を唱えてから楽しく食事をするっていうのが、お経の会のルールなんです。

私以下の名前、「妙泉」 [6] という名前は、高野山にいつか頂いたお名前ですね。これは僧名なんですよ。お大師さまの「空海」とかそういうのと同じ僧名で、得度 (とくど) (出家して受戒すること) したら、みんなもらうことになってます。私は実は戸籍もこれに変更したんです。そうしないと大学院修了時にいただく修了証書を僧名で書いてもらえないわけです。俗名は「麻由子」だったのですが、もちろん母がつけたこの名前もとても気に入っていたのですが、意味的には、「大麻」 (おおぬさ) という神道でお祓いをする時に使う道具をさすんですよ。大麻は人々の汚れをとるためのお祓いの道具です。私、東京時代は編集・ライターのお仕事をしてきたので、20年の間にインタビューを何千人としてきたんですね。人と話すと良い話もたくさんあるんですけど、やっぱり人間というのは明と暗の側面があるので、その人の暗の部分をついつい取り込んでしまうところがあつて。自分の名前にある「麻」の言霊がそういった暗の部分、汚れをとっているんじゃないかなと思って。名前を変えたら、これまでとは違う生き方、違う自分になるかなと思って変えたんです。自分としては自然な感じで変えたんですけど、みんなやっぱり戸籍を変えたと聞くと驚くんですね。「よく戸籍を変更できたね」と。でも、普通に2週間くらいでできました。いまは多重債務から逃れるために戸籍を変える人もいる時代ですので、人によっては家庭裁判所から「どうしてお名前を変えるのか」と呼び出しみたいなのもあるらしいですね。私の場合はスツと変更ができたので、よかったなあと思っています。仏様が名前を変更してもいいと、おっしゃってくださったのかもしれないですね。

(笑) 名前の意味は智慧が湧き出る泉ということで、現在の環境保全にも通じる「大地自然」を表しています。すてきな名前をつけていただいたので、名前負けしないようにがんばらなければと身のひきしまる思いでしたね。

高野山での暮らし、とくに現在のような修行生活は、自分自身がどんどん変化していくもの、またそうでなければ修行とはいえないので、先ほどもいいましたが、これからどうなるのか、楽しみでもありますね。高野山とは、そんな不思議なところですよ。ぜひ一度訪れてみてください。



## 自分の真ん中に戻ってこられる暮らし2

▶▶▶ Speaker



話し手：柘植 健

カフェ梵恩舎 経営

世界中を旅し、高野山の空気や水のきれいさ、そして何より人のあたたかさが気に入って、2005年に高野町にカフェをオープン。柘植さんは中・仏・伊・英・日の5カ国語を話す。奥様はフランス出身のベロニクさん。

私は鳥みたいに色んなところに行っていて、たまたま高野山で仕事を始めて、今までいさせていただきました。高野山には、すごく感謝してます。私、子どもと私の家内と3人で日本中をずっと旅をしていたんですね。無銭旅をして、お金も尽きてどうしようかなと思っていた時に、たまたま高野山に来て。高野山は観光地だから外国人がいっぱいいるんじゃないかな？と思ってね。私、ちょっと外国語が話せるので、これは町の人の役に立てるかもしれないと思って。町役場に行って、「何か仕事ありませんか」といったら、「ヘルパーの仕事なら」といわれまして「やります」。それから高野山に住み始めました。最初に町で見たもので印象に残っているのは、ものすごい巨大な木。バーンとそこら中にあるんですね。「なんだここは!」と思って。それで、すごく寒い。「なんて美しい所なんだろう」と。私、旅をずっとしてましたから、高野山に住む前はパリに住んでいたんですね。パリはすごく綺麗な町で、素晴らしくて、古い感じで、大好きです。

私は大田区で生まれて、横浜で育ちました。お父さんは真面目なサラリーマン。私の人生の転機となったのが、筋ジストロフィーと阪神淡路大震災です。高校生ぐらいの時に、筋ジストロフィーになったんじゃないかみたいなことを病院でいわれて。15歳ぐらいの時に友達とふざけてあそんでいたら、倒れて、連れていかれちゃったんですね。病院に。そこで検査されたらどうやら肝機能が変だと。数値が全然下がらない。これは筋ジストロフィーの疑いがありますって。いわれて、私は考えたんですね。これから、どうしようかなと。筋ジストロフィーは筋力がどんどん低下していくという病気で、今は、不治の病いとされていて。それで私はどんどんやりたいことを始めました。その頃、私はサーフィンをしたかったので、そのためにアルバイトをしました。サーフボードを買って、スクーターを買って、毎日のようにサーフィンをしていました。学校も行きながら。アルバイトと学業で忙しかったですね。

そして、私が18歳ぐらいの時に阪神淡路大震災がおこった。高校3年生ぐらいの時にピラ配りのアルバイトをしていたんですね。もちろん自分のやりたいこと、サーフィンのために。そしたらピラを配っている私の隣で、「苦しんでいる人に募金をお願いします」とずーっと1時間ぐらい募金を集めている人がいて。私は自分のお金のためにピラ配りしてたんですね。でも、その人は他の人のために働いている。その時にちょっと考えた。私はこれで良いのかな？と思ってね。ボランティアに行ってみようかなと思って、次の日からボランティアに行ったんですね。そこから1ヶ月ぐらい芦屋の小学校でずっと寝泊まりしながらボランティアをしました。被災すると、老人が家から出て来なくなるんですね。だから、その人たちを出して自衛隊のお風呂に入れる、そういうボランティアをしたんです。一人一人お風呂に入れて。そんな活動をしていましたね。それで、考え方がガラッと変わったんですね。みんな、これまで大切にお家を建てて暮らしていたんだけど、それが一気に災害で壊れてしまう。それで、私はやりたいことがわからなくなった。でも、とりあえず探してみようと思って、いろんな所に行くようになるんですね。いろんなことに興味を持ったり、ボランティアしたり、グリーンピース（環境保護団体）というところで働いたり、反核運動をしたり、そういうこともしてたんですね。今は別にやっていませんけどね。

阪神淡路大震災で、ボランティアしている時に会ったおじさんに影響されたんです。お坊さん。不思議なことに真言宗のお坊さんなんですけど。同じようにボランティアで、車を運転してくれた。私の耳元でね、「中国は良いよ、中国にいくとね、長い髪の毛のお姉ちゃんがいる、化粧してなくて、すごく綺麗なんだよ。本当の女性っていうのは、ああいう風に綺麗な」とか、どうのこうのっていつてくるんですね。その人とも現地で別れて、自分と向き合いたくなって、高校を卒業してすぐ一週間ぐらい山にこもっていたんですね。丹沢のほうに山があるんですね。山ごもりしたら、ちょっとさみしくなったから山小屋にいったんですね。そしたら、知らないおじさんに「お兄ちゃん、中国いくといいよ」といわれて。中国がいいと聞いたのが、これで2回目。もう行かないといけないかなと思って、それで中国に行きました。簡単にそんな風に行きました。

最初はチベットに行きたかった。山の本を読んだんです。チベットの人は死んだ時に鳥に食べさせられる。そういう儀式がある。それを読んでそれを見に行きたいなと思って。ただ行くだけじゃなくて、ちょっと長くいたいなと思って、留学先を探していたんです。その時は、情勢が良くなってチベットには行けなかった。だからチベットの近くの雲南省というところずっと住ましてもらって、そこで願書を出して大学に入りました。東南アジアが近かったから、ぐるぐる海外を旅しながら好奇心で色んなところいきました。インドに行ったりとか。インドは人が全然違った価値観で考えたり、動いたり、生活していたりしてましたね。

中国では二胡という、それもおじさんがメトロの中でこうやって弾いていたんですね。楽器ですね、バイオリンみたいな。それを聞いた時、時間が止まったんですね。これはすごい!マジックだと思って、そう思ったので先生を見つけて勉強しました。1年ぐらい勉強したんですけど。そして、その楽器を持ちながら色んなところで旅をしました。いろんな村に行ったりとか少数民族の人とかからね、色々、音楽を教えてくださいました。

中国では楽器以外に医療も勉強しました。なぜかという中国では本当にみんなにお世話になる。みんな優しいんですね。食べ物くれたりとか。寝るところを無料で提供してくれたりとか。そういう人たちにどうやって恩返しできるかなと思って、お医者さんになったらみんな喜んでくれるかなと。中医（中国医学）っていうのは何がすごいかなという

[1]



針でポンポンってしたらとりあえず痛いところは取れる、そういうマジックみたいな医療なんですね。せっかく中国にもいるし勉強してみようと思って、3年ぐらい勉強したんですが難しくて。その時に付きあっていたフランス出身の彼女がお国に帰らなければいけないといまして。で、フランスと一緒にについて行ったんですね。中国では、中国語と楽器と医療の入門編を学んだ上でフランスに行くことにしました。

フランスは大変ですよ。中国は5年間いました。フランスはまた全然違った空気なんですね。パリはうちの姉ちゃんが住んでいたから、ずっと前に泊まりに行ったことはあるんですが、都会なんですね。東京と同じように都会なんですけど、人間関係が冷たいんですよ。隣のコーヒー飲んでいるおじさんに世間話はできます。でも、それよりもやっぱり冷たいんですね。ちょっと悩みましたね。中国はみんな喋ってくれるので、すぐ友達になれるんですけど。ちょっと変な言葉で話していると、「おまえどっから来た。日本か。なんだ日本人か、お前。なんだ日本人はわるいんだぞ」とかいわれながら、仲良くなっちゃう。「そうそう、ごめんごめん」とかいいながら。フランスに行くとぜんぜん違う。フランス語も難しくてね。1年ぐらい家に引きこもっていました。こもり気味で自分の二胡をちゅうちゅう弾いて、練習していました。フランスは、結局3年ぐらいいました。

[2]



日本に戻ろうかなと思ったきっかけは、うちのおばあちゃんが亡くなってしまったんですよ。うちのおばあちゃん98歳で亡くなってしまいました。その時、カミさんと子どももいたんですね。お葬式に帰ろうと思って帰ってきたんですね。そしたら日本もいいじゃんと思ってね。日本も面白いねと。旅行でもしましょうかっていって、それが始まりなんですよ。ちっちゃい軽四のバンを買って、南から桜が咲いてたんですけど、桜前線と一緒に日本の南にいて南から北まで旅をしようと思って。私の二胡とカミさんが歌を歌うんですね。二人でこやうやう。でも、いろんな屋台とかならんでる横でやると怒られるんですね。商店街でやると警察がきて全然ダメなんですよ。フランスは結構、お金になるんですね、商売になる。日本だとなかなかそれができなくて、移動にはガソリン代はかかるし。それで出会ったのが高野山なんです。高野山の人に助けられた。高野山って世界的にみても有名なところなんで、ちょっと寄ってみたいと思ってきたのがきっかけです。

[3]



東京で桜の開花宣言があったんですが、東京はお金にならんぞと思って、それで九州から直接、高野山に来たんですね。もちろん高速なんか使わず、下道で来るんですけどね、途中で運転に疲れちゃったんでね。どうしようと。それでたまたまうちのカミさんが「ここに行きたい!」といて。それからが高野山の出会いなんですね。運良く。高野山に来たらお寺の息子さんがいまして、うちだったら安く泊めてあげるよといわれまして。3,000円ぐらいだったかな?そのぐらいで泊めさせてくれた。ずっと車で寝泊まりしてたので私は車で寝るつもりだったんですが、彼は優しく3人分の浴衣を持ってきてくれて、「あなたもどうぞ、泊まってください」といってくれてね。そういう優しい人に触れて感動して、ここはいいなと思ってそのまま移住してしまいました。ー (笑)



子どもがいるから、真剣に働こうと思ってコーヒー屋さん [1] で毎朝玉ねぎを切りながら、みなさんが幸せになるようにお祈りしてます。本当にみんな優しく子どもをみてくれる。子どもにも優しくしてもらって。周りのおじさんとかおばさんはずーっと子どものことを見ていてくれるし。子どもがここで育ってよかったなと今でも思いますね。みんなに名前を覚えてもらっているし、そこらじゅうの皆さんに。「ああ、今あなたの息子あちに行っちゃったよ」って、すぐ教えてくれる。私は子どもを何回探しにいったことか。なんかどっかにすぐ行っちゃうんですね。

菜食になったのは、お肉でお腹を壊したんですね、旅行中に。それでよく考えたんですね。お肉を食べなかつたら、多分、お腹を壊して死ぬってことはないなと思って野菜を食べてたんですね。肉を食べないと、自炊をしても安上がり。にんじんをかじりながらバンをオリーブで食べてた。そういう生活をしていたら菜食主義になってしまったんですけど。私みたいな人がたまにいますので、その人のためにご飯を作ろうかなと思って、玄米とオーガニックの野菜を使いながらランチ [2] をカフェ [3] で提供してます。

あまりいっぱいじゃなくて、自分たちが食べていく分のお金を、稼いでいます。必要なお金は、すごく少ないんですね。いろいろみんなに断ったりして、申しわけないです。高野山からちょっと離れたところに住んでいる友達も、すごい面白いんですけどね。旅人でチベットの広東の出身。この子も隣に住んでる、高野山に住んでるギターリスト。フラメンコのギターをしてる。彼は、お寺に働きに来ている。なんか面白いこういう人たちが集まってきて。勝手にお店やったりかかしてますね。はい。

## クロストーク

高野町出身の森本 一彦先生、移住者の佐藤 妙泉さん、柘植 健さんの3名をゲストにお迎えし、司会2名と共に、高野にある暮らしについて語り合いました。

### こころの在り方



司会1) このクロストークでは、「こころの在り方」というテーマで20分くらいお話しできればと思います。話をしていく際のキーワードとして「ご縁」「お導き」「寛容さ」「挑戦」「簡素さ」「継承」「五感」「雑念」をあげさせていただきました。こちらのキーワードは、佐藤さん、柘植さんのお二人も含め、移住者の方のお話を伺っていく中で私たちが感じたキーワードになります。ご縁を繋いでいったり、自分の気持ちにちゃんと向き合っただけで、出会った状況にあわせて無理なく行動していくことが、その後の移住に繋がっていくのではないかなと。そこで、今回は舞台が高野ということもありまして、「ご縁」「お導き」といったところで、キーワードを立てさせていただいています。柘植さん、佐藤さん、ご自身の移住までのストーリーを振り返ってみた時に、「ご縁」や「お導き」という言葉でイメージすることはありますか？

柘植) いい言葉ですね。そんな言葉は大事だと思います。「ご縁」や「お導き」って、向かう先が一つしかないじゃないですか。自分で向かう先を選んでる感じがしますが、そうじゃない。二つの選択肢があって、どちらにしようかなという、迷っている時間がすごくもったいないなと思って。一つの方に向いていくことが「ご縁」とか「お導き」って言葉の意味に合いますよね。でも、どうなんですかね。私は好きですね、この言葉。

佐藤) 高野山に来たらたいい誰もが訪れる場所に、奥之院というところがあるんです。歴代の武将とか、色々な方々のお墓があるところなんです。参道に石塔が立ち並んでいて、2キロくらい進んだところに御廟があって、弘法大師が定に入っておられると同時に、いまだご活動されている拠点です。すごく靈氣に包まれているんですけど、私が初めてそこに行った時に、弘法大師さまが「ここに来なさい」といっているような感じがして。弘法大師さまのお声が聞こえたような確かさがあるって、それが「ご縁」かなって。「ご縁」と「お導き」ですかね。

司会1) 高野山は自分に必要なタイミングになるといくことになるといわれている地域だと聞いて。そういうジグザグみたいなものに意味づけをするのは自分なのかもしれないんですけど、私も、このイベントもそうですし、仕事をこの先、20年、30年、どんな感じで頑張っていくらいいのかなって、悩んでいるタイミングで高野山に行くことになって。

司会2) うんうん

司会1) ちょっと悩んでいたタイミングで、高野に行かせていただいて、それこそお導きというか、自分はこれから何を大切にしていけばいいのか？と問いかけてくれたのが、高野っていう地だなんて感じていて。そういうのもあって、キーワードに「お導き」を立てさせていただいています。

司会2) 森本先生は、お生まれが高野山なんでしたっけ？「高野山って全員移住者の集まりでできた都市なんだよ」というお話をよく伺うんですが、先生みたいな出身者が外から来た移住者をどんなふうに見ていたのかというのが少し気になっていて。これまでいろんな地域の移住者と受け入れる側の視点を見てきたと思うんですが、先生は出身者として、外からいらっしゃる方をどんな感覚で見えらっしゃったんでしょうか？どんな時代でもいいんですけど。

森本) えっとね、私は高野町出身ですけど、高野山出身ではないんです。私は高野山の周辺の集落に生まれたので、ちょっと事情が違うんですね。

司会2) そっか、そっか。そうなんですね。

森本) 私の出身の地域は過疎化して、ひどい状態になっている村なんです。限界集落なんですね。過疎化が酷いところなんて、もう、住人が10人を切ってる集落もありますし、後期高齢者しかいないっていう集落も、実はあります。そういう視点から見ると、高野山って、華やかやなっていう感じは、しますね。

司会2) やっぱ、地域によって見方は全然違うんですね。そういった受け入れる側と移住する側のお話や、柘植さん、佐藤さんのお話を聞いていると、なんかこう、その場所に引っ張られて移住に繋がったのかなと思うところがある。ただ、それで片付けてしまうと、シンプルに「導かれた」で終わってしまうんですけど、一つ一つをちゃんと紐解いていくと、そこには実は、こういうことが起きて、ここにいることを選んだっていう個人の選択が、あったような気がするんですね。柘植さんが中国に行ったのは、偶然出会ったおじさんに「中国がいいよ」といわれたのが、2回も続いたからということもあると思うんですけど。

司会1) お導きって私は二つの考え方があると思うんです。一つが、仏様とか自分ではない違う存在に導かれたと考えるタイプ。もう一つが、自分の本心に導かれて進んだと考えるタイプ。この二つがあるんじゃないかなって思っています。柘植さんは、自分の心にまっすぐ正直に、導かれて進んできた感じがしますよね。お導きってというと、何か目指す先に何かがあってそこに向かって引っ張られて行くことのように思うんですけど、実は自分の本心に仕掛けてまっすぐ生きて行くことなんじゃないのかなって。

森本) 私、仏教学でも密教学の先生でもないんですけど、同僚からよく話を聞かれています。仏教の考え方は他の宗教とは考え方がちょっと違う。つまり、

キリスト教の考え方は、神がいて、神が人間をつくられたと考える。神様のいうとおり、したがって生きるだけやっという。地獄行こうが、天国行こうが、それはもう既に決定してるっていう考え方をするんですね。でも、仏教は全然違う。仏性（ぶつしょう）、それは自分の中にあるっていうんですね。それを自分の中で発見するという行為が、ほんとに“悟る”ことやっという考え方なんですね。そもそもの発想が全然違う。今ちょっとそういう話が出たので、一応、補足します。専門家ではないですけど、そんな話もあるってことで、参考にさせていただけたらと思います。



司会2) どうですか、佐藤さん。その辺、感覚的に何かありますか？感じるところで結構なんです。

佐藤) 質問に沿うかどうかかわからないんですけど、私には二人の子どもがいて上の子は大学生ですが、下の子どもは高野山と一緒に連れてきているんですね。小学校4年生の男の子なんですけど、生まれたときから酷いアトピーで、すごくからだ弱かったです。2011年の3月11日に東日本大震災が発生したこともあって、色々この子の将来のことを悩んでいた時期で、もうちょっと環境のいいところに行きたいなっていう思いがあったんですね。で、それで選んだ先が高野山。振り返ってみたらそれもあって高野山への移住に繋がっているんですけど、今ではすごくイキイキとして、体も大きくなってきて、健康になってきた感があるんですね。そういうところが、皆さんのお話を伺っていて、私が具体的にイメージするところかなって思います。

司会2) なるほど、なるほど。

司会1) 佐藤さんも、高野山へ引っ越されてから、表情が柔らかくなったねって息子さんにいわれたって伺いました。

佐藤) 息子に、落ち着いてきたねっていうふうにいわれます。東京の時は忙しくて、子育てもあるし、家事もあるし、仕事もあるし。今やってる仕事も、ボランティアでずっとやっていたものが仕事になった形です。そういうボランティア活動もあったり、動き回っていたので、子どもたちから見たら「お母さん、落ち着いてない」って思っていたのかもしれない。今もやっていること自体は変わらないんですけど、息子からはそういうふうにいわれましたね。

司会1) 都会での働き方についてのお話を、佐藤さんから事前に伺っていたんですけど、その中で、東京で働いていた時は「外と戦っていく」っていう、ほかの人と競い合って戦っていく、挑戦みたいな割合が多かったんだと。でも、高野に移ってからは、周りと競って戦うという形ではなくて、「自分と向き合って自分と戦う」、自分の研鑽していく、そういう挑戦の仕方変わったんだっていう話が、すごく面白いなってお伺いしていたんですけど。

佐藤) それは今、森本先生がおっしゃった“仏性”というところに関わるのかもしれない。都会では、いっぱい競争していかなければいけないし、人も多いし、仕事も競争して得たりすることもあります。だけど、密教っていうのが“仏性”を発見するものだとこのところ考えていくと、自分の中に向かうような挑戦なのかなって。

森本) そうですね。いろんな発想があるんですけど、要は仏教っていうのは、宗教っていつてますけど、絶対的な神を信じているって話でもなくて。「どう生きるか」っていう話を、実は弘法大師は中国から持ってきたものを自分なりに解釈しながら、日本流に作り直したんやと思います。そういう意味で、高野山っていうのは、そういう雰囲気、環境がまず全然違うと思いますね。もうそろそろだいぶ寒くなってきてたんで、暮らしにくいのは確かなんですけど。でも、空気感が多分、違うんじゃないかなと思います。それが宗教と結びついて、プラス自然環境がそうになっているっていう。そういう意味では魅力的だし、佐藤さんみたいな方に来ていただけるっていう雰囲気が高野山にはやっぱりあるのかなと思います。

佐藤) 環境が人をつくるっていうこともありますよね。

柘植) 「心」っていうのも自分が作り出したものだと思うんです。これまでの自分の経験が、自分の「心」をつくっている。どうやって心ができましたか？って考えていくと、何か自分に影響を与えたものがある。親の影響だったり、学校の教育だったり。いろんなもので心はできているから、思い違っている時もあると思うんですよ。だから、私が「これだ!」「お導きだ!」ってやってることの中には、失敗もたくさんありますし、それがすべてだとは思わないし、怪しいなって思いますよね。自分のそのチョイスっていうのが。でも、そうじゃなくて、みんなにほんとに生かされてる。

司会2) ああ、生かされている。

柘植) なぜかという、本当に自分が困っている時に誰かが助けてくれたりとか、これまでものすごくそういうことがあって。具体的に誰々さんがって、名前をあげたらきりがありません。私は、もうこれは神様が助けてくれてるんだよっていつてしまってもいいのかもしれない。でも、その延長線上で私はここに今いますよね。だからやっぱりそれがありますね、高野山には。山に助けられてるし、お大師さんに助けられてるし、みんなに助けられてるし。もう、最高ですよ。

司会2) 柘植さん、中国やフランスではそんな感覚に陥りましたか？そこは同じ感覚ですか？

柘植) あります。そういう誰かの助けが自然とくるんですね。これはあんまり、他の人には薦められないことなんですけど。みんなも持っているものをすべてなくしなさいとはいいませんけど、持たない人同士は自然に、協調していきまますよね。ほんとにそう私は思います。助け合ってみんなでなんかやりましようってなっている。そりゃ、自分に厳しく修行していくのもいいかもしれないんですけど、そこから出てくる本当のもの。協調とかね。こういうことやろうよっていつて、一緒に盛り上がっていけば、絶対に何かいいものができると思いますよ。

司会1) 環境が人をつくるって、そのお話がすごく高野山っぽいなと思って。空海さんが高野を選んだ理由、高野がいいと思った理由を書籍で読んだんです

けど、高野山が選ばれた理由みたいことを、森本先生、お話いただけますか？

森本) いろんな条件がありましてね、そりゃ、当然ながら。地形的に見れば、さつきいった蓮。仏教では蓮の花って大事なものなんですけど、それを体現している。それから水がある。他にも色々あると思うんですよ。何よりもこれ今、マイナスとして考えられていますけど、交通の便が悪いっていうこともあげられます。実は、近畿地方には比叡山という、最澄さんがつくった延暦寺というお寺があります。比叡山と高野山を比べるとすごくよくわかるんですね。比叡山って、京都に近すぎるんですよ。日帰りでのぼって帰って来れるくらい。朝にのぼって、夕方には帰って来れるってくらいの距離にあるんですね。歩いてのぼっても。高野山では、それは無理ですから、奈良から高野山に行こうが京都から行こうが、遠すぎるんですよ。逆に、静かに心落ち着けて修業ができる、男性ばかり集まって女性がない雰囲気っていう場所なんです。だから、高野山にね、色んな俗的なものを、本来は求めてはいけませんよ。落ち着きたい時に来ていただいたらいい。そこで住もうと思ったら、住んでいただければいいと思うんですね。そういう意味でいうと仏教の考え方って自分を見つめ直すですから、あとで、瞑想のワークがあると思いますけど、見つめ直すってことなんです。自分の体調を見つめなおす、自分の心を見つめ直す、そういう意味では、高野山が一番よかったんやろなと思います。

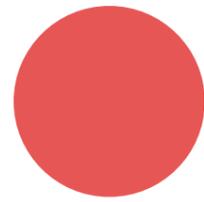
司会2) まさに、こころの在り方ですね。それってね。

佐藤) 京都に、東寺がありますが、このお寺は嵯峨天皇が弘法大師に託されたお寺です。弘法大師は瞑想するときは高野山に行って、瞑想は自分のため、プラス衆生のためもあるんですが、もちろんホントに瞑想に入りたいときには、高野山で行ったといわれます。やっぱり最後は高野山だったのかもしれない。当時では国家的な祈禱とか、国家のためにお仕事をする場所が京都で、高野山は瞑想する場所だったという説もあります。

司会2) そうなんですね。面白いですね。まだまだお話していきたいところではありますが、瞑想のワークに移っていきたくと思います。皆さん、ありがとうございました。



(終わり)



## 虹の瞑想法

和歌山にある暮らしを探っていくセッションを終え、最後に参加者の皆さんが、自分の暮らしと向き合い、ゆつくりと咀嚼していく時間をとるため、虹の瞑想法を、佐藤さんより行って頂きました。

真言密教の瞑想には、阿字（あじ）というご本尊が必要な「阿字観」という瞑想法もあるんですが、今回やるのは誰でもできる入門編です。初心者でも楽しく取り組んでもらえるように考えたものですので、気軽に取り組んでみてください。最初はウォーミングアップで、体操をしたいと思います。足や腰が痛い場合は、無理せず椅子に座っておこなってください。できる方は、床に座って行きます。呼吸は自由に、吸ったり吐いたり、普通にしてください。

### 0. ウォーミングアップ

それでは、合掌して、手を組んで息を吸いながら、そのままぐーっと上にひっぱられるような感じで伸ばしていきます。息を吐きながら、組んだ手をほどいて、身体の横にすーっと下ろします。そして、手を後ろにもっていき、背中側で手を組みます。組んだまま、ちょっと上に、無理せず、すーっとあげてください。息を吐きながら、下げます。はい、ではもう一回、いきましよう。ぐーっと上にひっぱられるような感じで伸ばしていきます。息を吐きながら、すーっとその手を下ろします。手を後ろにもっていき、背中側で手を組みます。組んだまま、頭を床につけられる方は下につけて、組んだ手を上にあげる。体勢を元にもどしてください。どうですか？少し血液の循環が良くなったと思います。今度は、ここまでの流れを自分のペースで行ってください。— これは今から瞑想に入りやすくするための体の準備です。

### 1. 虹の瞑想 足を組む

それでは虹の瞑想に入らせていただきます。皆さん、足はどうしていらっやいますか？自由でもいいんですが、ひとつは半跏坐（はんかざ）といって、片足を他の片足のものの上に組んで座る、こういうやりかたが、初心者向きかなと思います。結跏趺坐（けっかふざ）といって、蓮華座ともいう座り方もありますが、そういうのは足も痛くなりますからあまりおすすめはしません。弘法大師・空海の言葉に「目を閉じて端坐し、仏徳を思念せん」という言葉があります。これを現代風によみときますと、「仕事や育児、介護で、現代人は様々なおつきあいで、趣味の活動でほんとに忙しくて、めまぐるしく、特に都会の方々は、忙しい日々を送ってらっしゃると思います。そんななかで、意識して自分のために瞑想の時間を3分でもいいから取り入れてみませんか？」という意味にとってもよいと思います。自分のためだけに集中できる、その贅沢な時間を、私も都会暮らしのときは、時間をとろうと思ってもとれなかったんですけど、そういうのを皆さんといっしょにこれからやらせて頂けたらと思います。

いまはウォーミングアップをやりました。この動きはヨーガでは太陽礼拝のポーズと言います。真言密教は大日如来がご本尊。日本の神道だと天照大神。各宗教に対応していますね。真言密教は、いろんな宗派を取り込むっていう言い方は良くないかもしれませんが、いろんなものをゆるやかに包括する側面があります。

### 2. 虹の瞑想 虹をイメージする

今回、虹の瞑想法なんですが、虹の写真はお手元にありますか？お配りしたのは、高野山で撮った虹です。高野山の代表的な写真家、永坂嘉光さんが

撮影されたものです。高野山って雨が多いですよ。高野山には龍神様がいらっしゃるという説があります。龍神様が高野山に住んでいて、雨をふらしたりするっていう話です。高野山は空も魅力的で、毎日毎日、違った表情をしています。この虹を見ながら虹を自分の中に取り込んでいただいて、イメージしてみてください。今から目を閉じて瞑想する時にイメージしていただけたらと思います。色は、赤、オレンジ、黄色、黄緑、青、紫っていう組み合わせです。瞑想する時に、私がイメージをお伝えしますので、それを自分の中でもイメージしてみてください。

虹は、龍に例えられます。虹は、生きています。壇上伽藍（だんじょうがらん）っていう場所が高野山にはあるんですけど、そこに虹が落ちてくるような、そんな写真もあります。面白いですね。それでは、照明を少し落として暗くします。目は軽く閉じてください。

### 3. 虹の瞑想 色を身体に取り込んでいく

呼吸はゆつくりとしてください。（10秒ほど間をあける）まず、足の付け根にぼかぼかと太陽が当たっているイメージです。（15秒ほど）身体の中心がぼかぼかとしてきます。（15秒ほど）

次に、少しおへその下の方について、オレンジ色の、みかんのようなイメージをしていきます。（20秒ほど）だんだんと呼吸が見えて来たかと思います。吸って吐いたときにお腹が動くのを感じる方もいるかもしれません。

金色の稲穂のイメージをお腹のところに持っていきます。稲穂が風にそよいでいます。（15秒ほど）

胸のあたりに黄緑色の大草原が広がってきました。大きく、胸に息を吸い込んでください。緑の空気が胸にはいつてきます。（10秒ほど）普段、知らず知らずのうちに溜め込んだ心の垢が、すーっと風に飛ばされていきます。だいぶん楽になってきましたね。

のどの黄緑色が今度は緑になって広がっていきます。のどは大事な場所です。お腹と直結している場所なので。緑です。夏の濃い緑。（15秒ほど）

虹色がどんどん自分の身体に一体化していつて、今度は顔のあたり、特に眉間のあたりにすーっと冷たい冷気が感じられるでしょうか。青のイメージをお願いします。眉間のところに、青いイメージです。群青色の青空のイメージです。（10秒ほど）

背筋がびーんと伸びて来て、頭の上に紫の光があります。（10秒ほど）自然に身体が伸びていく気持ちよさを感じてください。紫のまるい光がみえます。（30秒ほど）背筋に1本の竹の筒のようなものが通ったのを感じられる方もいらっやるかも知れません。

この七つの色をイメージした身体の部分には、それぞれ身体の重要な部分、チャクラといわれるような部分があります。いつも頑張ってくれている自分の身体に、労るという意味ではなく、「ありがとう」と思ってください。（30秒ほど）

はい、ゆつくりと目をあけてください。ゆつくりと、自分のタイミングで戻って来てください。こういった瞑想法になります。家でもできると思うので、いまイメージしたものではなくて自分の好きなものをイメージしていただいて、すこし寝る前でも行っていただくと、結構、熟睡できると思います。どうぞ続けてみてください。繰り返していけば、色をイメージしなくても普通に瞑想することができるようになりますよ。





## 最後に

田舎暮らしや自然豊かな場所での子育て、起業できる条件が整っているからなど、移住する理由は千差万別です。都市と自然のバランスがいいエリアから、どっぷりと自然に浸れるエリアまで、自分のしたい暮らしに合わせて、住む場所を調整することができる場所も、和歌山の魅力の一つ。そんな和歌山と出会い、移住を考える時、どこの地域も魅力的だからと、迷ってしまうこともあることでしょう。あるいは、どこもおぼろげで、同じように見えてしまう場合もあるかもしれません。自然、制度、人、文化。それぞれの興味を入口に、覗いてみた地域の奥には、100年、200年、それよりも、もっとも前から、連続とその地で受け渡されてきた歴史とそこで暮らす人の想いがあります。それらは、日本全土を見渡してみても、一つとして同じものはありません。世界レベルの文化を有する和歌山県は特に、知れば知るだけ好きになる。地域で暮らす面白さ、奥深さを、イベントに参加すること、レポートを読むことで、少しでも感じて頂けたでしょうか。

イベントの中で、毎回最後に、「熊野にある暮らし」「高野にある暮らし」はどんな暮らしでしたか？自分のしたい暮らしを実現するためにどんなことをしたいと思いませんか？という質問を参加者に投げかけています。熊野にある暮らしは「自然の一部になれる」「自分に、そして周りに

正直な」「一つ一つを丁寧に感じながら生きる」「昔からある文化を大切に紡ぐ」「思い出す」「土地の物語と人の物語が出会う」「人が暮らしの原点に立ち戻れる」暮らし。高野にある暮らしは「静かに“生きていること”を実感できる」「自分と向き合う」「人生や想いが交差する」「人が自然と導かれていく」「人のあるべき姿を見つめる」「普段の生活をしていて、時に聖なる軸で瞑想する」暮らし、などがあがっていました。「1年後、日本各地で旅をしながらの暮らしがしたいから、高野によって、高野独特の雰囲気味わいたい」「5年後、雑念のない暮らしをしたいから、生活のありようを考え直したい」「複数拠点で都市と田舎暮らしをしたいから、地政学を学び、人と繋がりたい」「40年後、東京以外で静かで人と繋がれる暮らしをしたいので、もっと日本の様々な場所の文化・文脈について知りたい」。受け取ったものがなんだったのかも、これからどうしたいかも、参加者一人一人によって、ばらばら。でも「暮らしに向き合いたい」という思いは一緒でした。「これから、どこで、どんな暮らしをしていこうか」。まずは誰かとこれからの暮らしについて語り合ってみませんか？そこに和歌山がいたらやっぱり嬉しいけれど、知ること、話すことで、自分にとっての幸せな暮らしにちょっとでも近づける人が増えたら、こんなに嬉しいことはありません。

## 移住窓口の紹介

### 【東京 窓口】

東京都千代田区有楽町 2-10-1 東京交通会館内  
☎ 03-6269-9883 FAX 03-6273-4404  
案内時間：水曜～日曜（月、火、祝日定休）10:00-18:00  
※ 夏期休業期間、年末年始休業期間はお休みです。

### 【大阪 窓口】

大阪府大阪市中央区本町橋 2-31 シティプラザ大阪内  
☎ 06-4790-3000 FAX 06-4790-3111  
案内時間：木曜日 11:00-15:00  
※ 木曜日以外に面談をご希望の方は、事前に連絡してください。  
※ 夏期休業期間、年末年始休業期間はお休みです。

### 【和歌山 窓口】

和歌山県和歌山市本町 1-22 Wajima 本町ビル1階  
☎ 073-422-6110 FAX 073-422-6150  
案内時間：水曜～月曜（火、祝日定休）9:30-18:00

### 【その他・支援制度等について】

和歌山県 企画部 地域振興局 移住定住推進課  
和歌山市小松原通 1-1  
☎ 073-441-2930 FAX 073-441-2939

### 【和歌山県ふるさと定住センター】

和歌山県への移住を考えている方や、わかやま暮らしに興味をお持ちの方のために、移住に関する相談や情報提供、移住イメージを実感できる体験研修を行うとともに、移住後の課題や悩み事の相談、生活する上で役立つ体験研修まで、移住前から移住後に至るあらゆるわかやま暮らしをサポートしています。各研修、相談及びアドバイスはすべて無料です。なお宿泊費・食費・交通費等は自己負担です。

### 和歌山県東牟婁郡古座川町直見 212

☎ 0735-78-0005 FAX 0735-78-0150  
案内時間：月曜～金曜（土、日、祝日定休）9:00～17:00  
※年末年始はお休みです。

### 【全市町村に「ワンストップパーソン」を配置】

和歌山県では全市町村に「ワンストップパーソン」が配置されています。ワンストップパーソンとは、各市町村の窓口で移住希望者の相談に対応する担当職員のこと。地域住民や先輩移住者で構成される「受入協議会」もあるので、サポート体制はばっちり！移住で悩んだら、気軽に相談しよう！  
※ワンストップパーソンへのご相談は、各市町村役場までご連絡ください。

### レポート関連市町の問い合わせ先

- ・和歌山県 移住定住推進課 ☎ 073-441-2930
- ・新宮市 熊野川行政局住民生活課 ☎ 0735-44-0301
- ・那智勝浦町 観光産業課 ☎ 0738-29-4455
- ・田辺市 山村林業課 ☎ 0739-48-0303
- ・高野町 産業観光課 ☎ 0736-56-9001